

領域2

オープンアクセス環境下における 同定機能導入のための恒久識別子実証実験

金 沢 大 学

東 雅彦 (情報部長)

橋 洋平 (情報部情報企画課専門職員)

はじめに

金沢大学附属図書館は、国立情報学研究所の学術機関リポジトリ構築連携支援事業の第3期 CSI 委託事業（平成22～24年度）で、「オープンアクセス環境下における同定機能導入のための恒久識別子実証実験」と題して、国内の機関リポジトリへの著者識別子（著者に付与される恒久的に利用できる一意の ID 番号）登録機能実装を推進するための事業を実施した。

この報告書では、3年間の事業の成果と国内の機関リポジトリへの著者識別子導入に関する課題をまとめ、今後の展望を示す。

目次

I	事業の目的	1
II	事業の背景	1
	1 著者同定の必要性	1
	2 著者識別子についての世界的な動向	1
III	実施内容	1
	1 平成22年度	2
	2 平成23年度	2
	3 平成24年度	3
IV	著者識別子に関するアンケートの実施結果報告	4
	1 「機関リポジトリへの「著者識別子」登録機能実装に関するアンケート調査【機関リ ポジトリ導入機関対象】」実施結果報告	4
	2 「著者識別子に関する教員の意識調査【機関リポジトリ設置大学に所属する教員対象】」 実施結果報告	11
V	成果・波及効果	13
VI	課題及び課題解決へ向けての展望	14
	1 著者識別子の必要性についての理解の拡大	14
	2 著者識別子の登録率の向上	14
	3 著者識別子として利用する番号の検討と国際的な識別子への対応	15
VII	今後の計画	15
VIII	引用文献・注記	16
	別紙：	
	別紙1～6	17

I 事業の目的

この事業の目的は、国内の機関リポジトリに著者識別子を登録する機能の実装を進めることにより、オープンアクセス環境下で著者同定を容易に行える環境を実現することである。

II 事業の背景

1 著者同定の必要性

情報量が際限なく増大している現在のインターネット環境下における学術情報流通においては、論文等の著者の同定が困難な場合が散見される。複数サイトで公開された論文が同一内容であるか、同一著者によるものかを一見して判断することも難しい。こういった問題¹を解決することは、学術情報を電子的に流通するための基盤形成上の課題となっている。

機関リポジトリを学術情報流通のプラットフォームの一つとするオープンアクセス環境下においてこれらの問題を解決するため、次の3つの対象を恒久識別子により識別できるようにすることが求められる。

- ①コンテンツの著者
- ②著者の所属機関
- ③コンテンツそのもの

このうち、③の「コンテンツそのもの」については、DOI (Digital Object Identifier, デジタルオブジェクト識別子) による識別が国際的に行われてきた。平成23年からは、国内で発行された紀要等の学術論文についてもジャパンリンクセンター (JaLC)²によってDOIを付与しようという動きが始まっている。

この事業では、これらのうち特に検討が遅れている①の「コンテンツの著者」のうち、特に「学術情報の著者を同定するための恒久識別子 (以下、「著者識別子」と呼ぶ)」を機関リポジトリに導入するための実証実験を行った。

2 著者識別子についての世界的な動向

著者名典拠や著者同定機能の導入については、正確なコンテンツ同定のための必須事項として、近年、大学、研究所、学会、非営利法人、出版社、企業等が参加する形で国際的な検討が始まっている。その代表が ORCID (Open Researcher and Contributor ID)³である。

ただし、機関リポジトリへの著者識別子の導入については端緒についたばかりであり、日本国内では普及していない。この状況を改善し、著者識別子の普及を図るため、機関リポジトリ用ソフトウェアとして最もよく利用されている DSpace に著者識別子を導入するための事業を実施することにした。

なお、金沢大学では国立情報学研究所からの委託事業として、著者 ID に関する以下の事業を行ってきた。当事業はその後継事業となる。

平成18～19年度	業績データベース・機関リポジトリ連携プロジェクト
平成20～21年度	研究者情報システム連携プログラム

III 実施内容

上記の目的を達成するため、各年度で以下の事業を行った。

¹ インターネット環境下で著者識別に関する典型的な問題として、蔵川他(2012)では、次の4点を挙げており、その解決策として、世界中の研究者を一意に同定する識別子が必要と述べている。①同姓同名問題、②異動する研究者の同定、③研究者 ID の統合、④所属研究者の情報の集約。

² JaLC については、加藤他(2012)に概要がまとめられている。

³ 学術情報流通の世界を対象として、さまざまな利害関係者が集まって研究者の名寄せの問題に取り組む国際的な組織 (蔵川他 (2012)。ID 自体も ORCID と呼ばれる。

1 平成22年度

13:00~16:45

(1) 金沢大学学術情報リポジトリ KURA のシステムの整備

金沢大学学術情報リポジトリ KURA のシステムを DSpace1.6 にバージョンアップし、著者識別子を登録するためのフィールドを設定した。金沢大学では、著者識別子として科研費研究者番号を採用することとし、併せて以下のカスタマイズを行った。

- 著者識別子登録・公開関連ツールの実装（研究者リゾルバー⁴または科研費データベースから著者識別子を取り込むためのツール）
- JAIRO（日本国内の機関リポジトリのポータル）から著者識別子を取り込むことができるように crosswalk の設定を変更
- 検索結果画面の各著者欄から研究者リゾルバーへのリンクの形成

(2) KURA への著者識別子の遡及登録

現職の教員について、著者識別子の一括遡及登録を行った。

(1) (2) の作業の後、金沢大学では KURA に新規にレコードを登録する度に、学内教員の著者識別子の登録を行っている。また、KURA に登録したレコードについては、JAIRO から、正しく著者識別子を取り込まれるようになった。

(3) ワークショップの実施

著者識別子に関する世界的な動向、今回の実証実験の内容、事例等についての情報交換を行うため、以下のワークショップを開催した。

- タイトル：名寄せのこれから：研究者 ID サミット
- 日時：平成23年2月17日（木）

● 場所：学術総合センター会議室
（東京都千代田区）

- 参加人数：27名（登壇者含む）
- 登壇者：武田英明（国立情報学研究所教授）、蔵川圭（国立情報学研究所特任准教授）、守本瞬（金沢大学附属図書館）、徳安由希（九州工業大学附属図書館）、鈴木敬二（元大学図書館職員、システムエンジニア）

その結果、一般参加者やシステム業者を含む関係者との間で情報共有を行うことができ、著者識別子登録の推進のためのコミュニティ形成の基盤を作ることができた（詳細は以下のページ参照）。

http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kura/nayose_ws_report.html

(4) プロジェクトの解説サイトの英文化の実施

当プロジェクトの事業内容の英訳を行い、英文解説サイトを作成した。

2 平成23年度

(1) 著者識別子登録に関する複数大学での実証実験

著者識別子登録機能についての実証実験を複数の大学で行うため、DSpace を対象として、実験に参加する機関を募集した。その結果、以下の大学から応募があった。

- 北海道大学
- 長崎大学
- 奈良女子大学
- 関西学院大学
- 大阪市立大学（DSpace 以外のシステムについて、自費で実証実験に参加）

これらの機関の機関リポジトリについて、平成22年度金沢大学で実施した内容と同様の

⁴ 国立情報学研究所が提供する日本の研究者を対象とした研究者識別子であり、Web 上の研究者リソースへのリンクを実現したサービス (<http://rns.nii.ac.jp/>)。登録されている研究者には研究者リゾルバー ID という識別子が付与される。この ID は、科学研究費研究者番号と紐づけられている。

作業を行った。

以上の結果、実証実験に参加した5大学でも著者識別子の登録及び JAIRO からの取り込みが可能となった。平成25年3月18日現在、各大学で以下の件数の著者識別子が登録されており、著者識別子の運用についての道筋を示すことができた。

表1 著者識別子登録件数

機関名	全件	ID 付与数	%
北海道大学	40,376	6,190	15.3%
長崎大学	24,172	9,248	38.3%
関西学院大学	7,864	1,848	23.5%
金沢大学	29,097	10,963	37.7%
奈良女子大学	2,386	885	37.1%
静岡大学	6,219	4,492	72.2%
大阪市立大学	4,524	1,941	42.9%
合計	114,638	35,567	31.0%

(注)

上の表は、機関リポジトリに著者識別子を登録し、かつ、JAIRO からハーベスティングを受けている機関のデータである。

静岡大学は今回の実証実験とは別に著者識別子登録機能の実装を行った。

(データ提供：国立情報学研究所)

(2) ワークショップの実施

著者識別子登録機能の実装に関する問題点を把握するために、平成23年度に実証実験に参加した大学を中心に参加者を募り、以下のワークショップを開催した。

- タイトル：研究者と論文とを結びつけるために：研究者 ID サミット2
- 日時：平成24年2月14日（火）13：30～17：00
- 場所：大阪市立大学 学術情報総合センター
- 参加者数：37名
- 登壇者：武田英明（国立情報学研究所教授）、蔵川圭（国立情報学研究所特任准教授）、内島秀樹（金沢大学附属図書館）、守本瞬（金沢大学附属図書館）、澤村俊祐（長崎大学附属図書館）、中村健（大阪市立大学学術総合センター）、高久雅

生（物質・材料研究機構）、谷藤幹子（物質・材料研究機構）

その結果、著者識別子に関する論点の整理と意見交換を行うことができた。

http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kura/nayose_ws/2011_report.html

3 平成24年度

平成22～23年度の事業を通じて、DSpace による著者識別子登録機能の実装モデルを提示することができた。また、平成23年度のワークショップで意見が出されたとおり、実装実験参加機関からは一定の評価が得られた。その一方で、表1のとおり、実証実験参加大学でも全体の30%程度のレコードにしか著者識別子は付与されておらず、著者識別子の登録件数や登録機関の数を爆発的に増やすことはできなかった。

事業3年目の平成24年度では、この状況を改善するため、国内で最も利用されている機関リポジトリ用ソフトウェア DSpace のバージョンを1.5以上に上げるための汎用ツールの開発の可能性を探った。そのために、DSpace に詳しい複数のシステムエンジニア（株）アグレックス及び自営システムエンジニア鈴木敬二氏）に対して聞き取り調査を行った。その結果、以下のような理由で汎用的なプログラムを作ることは現実的ではないことが分かった。

- バージョンアップのためには1大学あたり100万円程度の経費がかかる
平成23年度の実績から、単純に DSpace のバージョンアップを含む作業は1大学あたり60万円強の経費が掛かっており、これに SE の派遣経費、データの移行等の費用を勘案すると凡そ100万円程度の経費を要している。
- バージョンアップを行っても魅力的な機能は少ない
著者識別子を付加する項目を確保するた

めにDSpaceのバージョンアップをV1.4からV1.5以上に行うわけであるが、バージョンアップに伴う機能向上は殆ど見当たらない。そのために現状で著者識別子導入を検討していない機関ではバージョンアップをする必要性が直ちには起きない。

- バージョンアップ用の汎用プログラムを作る経費は、金沢大学が平成25年度当初に要求した経費(200万円)では作成できない。
- 仮に汎用的なプログラムを開発しても設定用パラメータが機関によって異なるため、各機関の実態に即した対応が必要となり、専門的な知識がないとバージョンアップの作業は難しい。DSpaceはそれぞれの機関毎にデザインや使う機能、操作性が異なる。機関毎に異なる部分はDSpaceを初期セットするパラメータで行うが、このパラメータのセットが専門的な知識や移行前に状況を把握していないと作業が難しい。

以上を勘案し、平成24年度は事業の方向性を見直し、著者識別子登録に関する課題を探るために、次章で報告する2つのアンケートを実施した。以下、これらのアンケートの実施結果を紹介し、今後の展望を行う。

IV 著者識別子に関するアンケートの実施結果報告

平成22～23年度の事業の実施を通じて、次の4点が課題であると予想した。

- ① 国内の機関リポジトリへの著者識別子の登録は端緒にすぎたばかりである。著者識別子そのものについての各機関の認知度が低いのではないかと。
- ② DSpaceに著者識別子登録機能を実装するには、DSpaceのバージョンが1.5以上である必要がある。また、実装に関してはカスタマイズのための経費が発生する。この点が普及の障壁となっているのではないかと。

- ③ カスタマイズを行ってまで実現したい魅力的な機能が少ないため、ニーズがないのではないかと。
- ④ 著者識別子をめぐる国際的な動向(ORCID等)との関連が明示されていないため様子を見ているのではないかと。

また、国内の機関リポジトリへの著者識別子登録機能の普及を進めるためには、前提として著者識別子に対する、研究者自身のニーズや意識も把握しておく必要があると考えた。

以上を明らかにするため、平成24年度は、以下の2つのアンケートを実施した。

- ① 機関リポジトリへの「著者識別子」登録機能実装に関するアンケート
【機関リポジトリ導入機関対象】
- ② 著者識別子に関する教員の意識調査
【機関リポジトリ設置大学に所属する教員対象】

以下、各アンケートの実施内容及び結果について報告した後、現状と課題の整理を行う。

1 「機関リポジトリへの「著者識別子」登録機能実装に関するアンケート【機関リポジトリ導入機関対象】」実施結果報告

(1) 調査概要

国内の機関リポジトリ設置済み機関における、著者識別子登録機能の実装及び機関リポジトリのシステム管理の実態と課題を把握するための調査。

(2) 調査期間

平成24年12月22日～1月26日

(3) 調査方法

学術機関リポジトリ構築連携支援事業のサイトに掲載されている機関の機関リポジトリ担当者宛てに別紙1の質問紙を郵送した。回答は、郵送、e-mail添付、FAXのどれでも良いものとした。

(4) 調査結果

調査結果は別紙2, 別紙3のとおりである。以下設問ごとに結果の分析を行い、最後に全体のまとめを行う。

① 回答率

212機関（共同リポジトリを含む）に配布し、154機関から回答があった。回答率は73%だった。機関種別の回答率は図1のとおりで、国立大学がやや高かった。

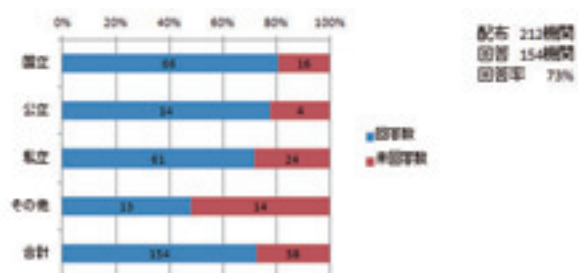


図1 機関種別の回答率

② 著者識別子の認知度

「著者識別子」という言葉について、「知っている」と回答した機関は117で、回答のあった154機関中の76%だった。機関種別の認知度は図2のとおりで、やや国立大学の割合が高かったが、それほど大きな差はなく、「著者識別子」という用語自体はかなり普及していることが分かった。

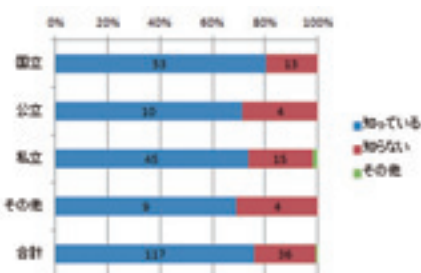


図2 著者識別子の認知度

③ 著者識別子登録の利点の有無

著者識別子を機関リポジトリに登録する利点の有無について尋ねたところ、135機関（88%）の機関が「利点がある」と回答した。図3のとおり、機関種別に関係なく高い値を

示しており、機関リポジトリ運営者にとっては著者識別子登録の必要性が認められていることがわかった。その点で今回の事業については実施する意義があったと言える。

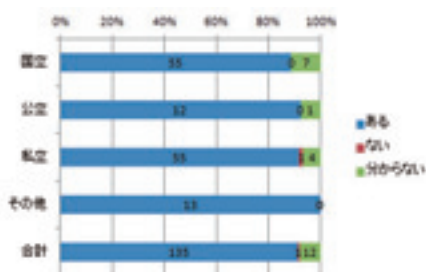


図3 著者識別子登録の利点の有無

④ 著者識別子登録の利点

設問③で「利点あり」と回答した機関に対して、著者識別子を登録する利点について尋ねたところ、図4のとおり「同姓同名の区別（著者の識別）」と「改姓への対応（名寄せ）」という2機能が利点として多く挙げられた。

IDを付与することによる「各種データベースとの連携」や「成果の一元的管理」がその後続いた。業績評価や国際的動向については、低かった。

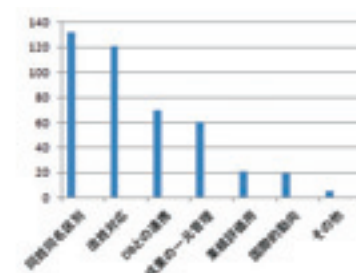


図4 著者識別子登録の利点

⑤ ORCIDの認知度

国際的に利用できる著者識別子 ORCID の認知度は、「知っている」と回答した機関が19%、「名前だけ聞いたことがある」と回答した館が36%で、まだ十分浸透しているとは言えない。特に私立大学については、図5のとおり過半数の機関が「名前を聞くのも初めて」という状況だった。



図5 ORCID の認知度

⑥ 著者識別子の登録状況

各機関リポジトリへの著者識別子の登録状況は、「登録している」「登録予定」を合わせ、32機関(25%)だった。機関別にみると、図6のとおり国立、公立大学の40%近くで登録または登録予定となっているのに対し、私立大学では20%以下となっている。プロジェクトを行ったが爆発的に普及させることができなかったことが改めて示される形になった。



図6 著者識別子の登録状況

⑦ 著者識別子として利用している ID

著者識別子を登録または登録予定の機関に対して利用している ID を質問したところ、図7のとおり「研究者リゾルバー ID」「機関内の研究者番号」「科研費研究者番号」等の3つに分散していることが分かった。

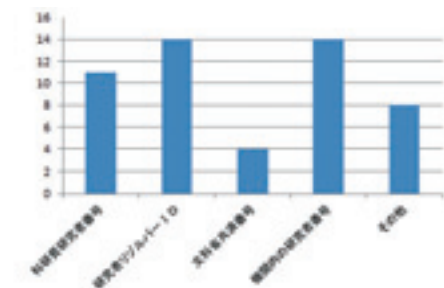


図7 著者識別子として利用している ID

将来、著者識別子については世界的な著者識別子との連携を取ることが求められているが、そのためには、これらの ID を国内的に管理し、世界的な著者識別子と紐づける仕組みを持続的に運用することが必要となる。

⑧ 著者識別子の付与対象

どういう著者について著者識別子を付与しているか尋ねたところ(複数回答可)、図8のとおり、大半の機関では、機関内の研究者に限定して付与していることが分かった。学外の共著者や将来の研究者である大学院生については、登録されていないため、網羅性の点で問題が残っていると言える。

なお、「全著者」と回答した機関については、「研究者リゾルバー ID を持つ全著者」と回答した館もある。イメージとしては NACSIS-CAT の著者名典拠リンク形成と似た形と考えられる。

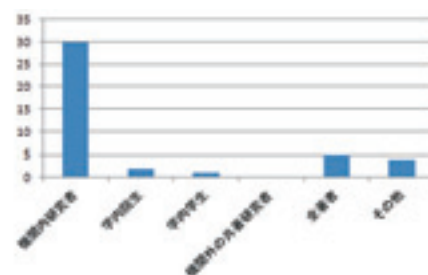


図8 著者識別子の付与対象

⑨ 複数著者がいる場合の著者識別子の登録形態

複数著者がいる場合の対応についても、図9のとおり各機関内の研究者のみに付与している機関が大半だった。作業効率と効果を対

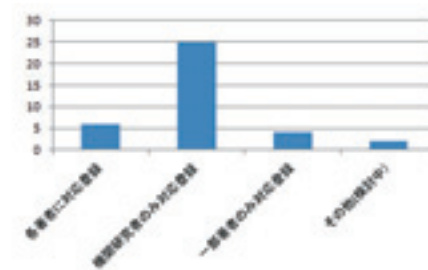


図9 複数著者がいる場合の著者識別子の登録形態

比して、他機関の著者への識別子の付与については、積極的に進まないことが予想される。

⑩ 機関リポジトリと他データベースとのリンク

機関リポジトリと他データベースとのリンクについては図10-1のとおり、25機関で「リンクしている」「リンクの予定あり」と回答があり、「いいえ」と回答した11機関を大きく上回った。

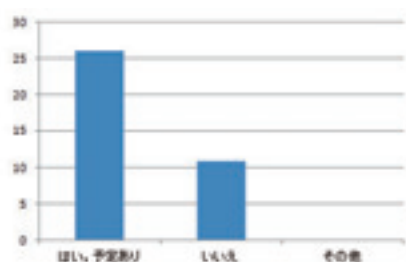


図10-1 機関リポジトリと他データベースとのリンク

具体的には、図10-2のとおり、各機関の研究業績データベースや研究者リゾルバーとのリンクを行っているところが多かった。

当然のことながら、IDをリンクのためのキーとして活用しようという意図が読み取れる。

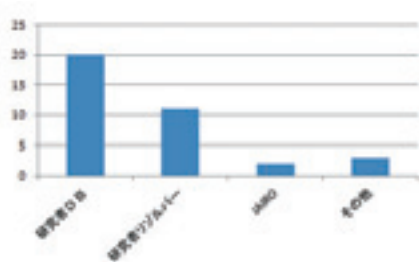


図10-2 リンクしているデータベース

⑪ 著者識別子を登録しない理由

著者識別子を登録していない機関に対して、その理由を尋ねたところ、図11のとおり、「カスタマイズに手間がかかる」「利用可能にするための方法が不明」が多く、「必要性がない」という回答は少なかった。

機関別に見ると、私大で「その他」が多かっ

たが、内容としては「情報がなく判断できない」という意見が中心だった。

機関リポジトリの運用に関する技術が不足している点と著者識別子に関する情報が不足している点が問題として浮き上がった。

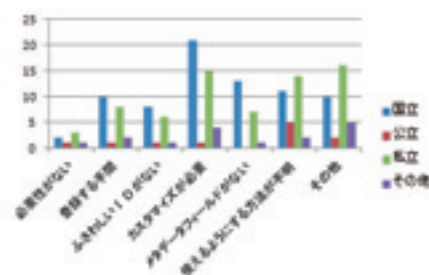


図11 著者識別子を登録しない理由

⑫ 利用している機関リポジトリソフトウェア

各機関で利用している機関リポジトリのソフトウェアとしては、図12のとおり DSpace が77機関でいちばん多かった。ただし、私立大学では、WEKO (JAIRO Cloud) を採用している機関が22機関で DSpace と拮抗していた。今回の事業では DSpace 中心に考えてきたが、著者識別子の本格的導入を検討するならば、今後は WEKO での対応抜きには考えられないだろう。

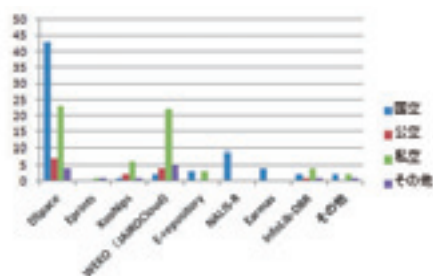


図12 利用している機関リポジトリソフトウェア

⑬ DSpace のバージョン分布

DSpace を使っている機関に対して、DSpace のバージョンを尋ねたところ、図13のとおり、幅広く分布していることが分かった。Windows Update に代表されるように一般にソフトウェアについては、最新バージョンに定期的に更新しながら利用することが想

定されているが、DSpaceの場合はそうっていない。そのことが著者識別子の普及を阻害していると言える。

ただし、著者識別子の登録用フィールドのあるバージョン1.5以上になっている機関は過半数を超えていることも分かった。「その割に」普及していないことが問題と言える。

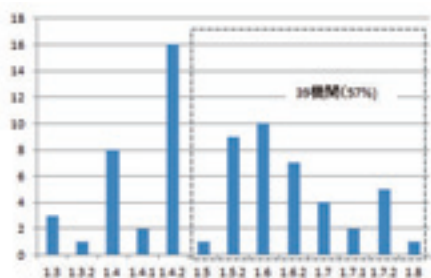


図13 DSpaceのバージョンの分布

⑭ DSpace1.5以上での著者識別子の登録について

DSpaceを使っている機関に対して、DSpaceのバージョンを1.5以上に上げることで、著者識別子登録用のフィールドを持っていることを知っているかどうかについて尋ねた。その認知度は図14のとおりで、40%程度だった。

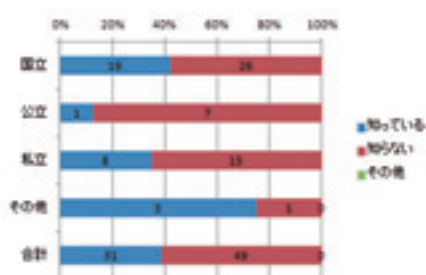


図14 DSpace1.5以上で著者識別子登録用フィールドを持っていることの認知度

⑮ 機関リポジトリ用ソフトウェアのバージョンアップの状況

機関リポジトリ用ソフトウェアのバージョンアップの状況について尋ねたところ、図15のとおり定期的にバージョンアップを行っている機関は12機関(8%)と少数派で、導入後実施していないという機関が71機関(46%)

といちばん多かった。

機関種別に見ると、国立大学で、カスタマイズ等の際に合わせて実施している機関が20機関とかなり多かった。国立大学以外で「その他」の割合が高いが、その内容は国立情報学研究所提供のWEKOを利用しているため、バージョンアップを意識する必要がないというものだった。その他、図書館システムの機能の中に組み込まれてしまっているため、バージョンアップを行っていないという機関も見られた。

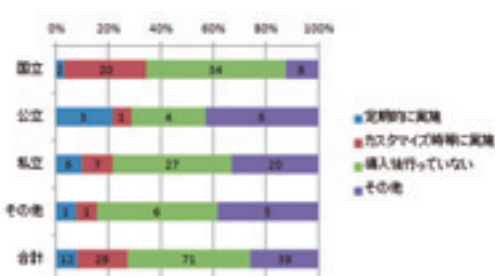


図15 機関リポジトリ用ソフトウェアのバージョンアップの状況

⑯ バージョンアップ作業の担当者

バージョンアップを行ったことのある機関に対して作業を実施した担当者について尋ねたところ、図16のとおり、外注業者に依頼している機関が27といちばん多かった。このことは、国内の各機関では、職員が機関リポジトリのシステムを運用していく状況になっていないことを示している。

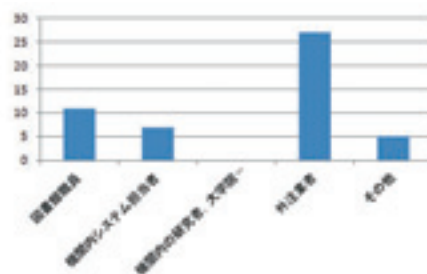


図16 バージョンアップ作業の担当者

⑰ バージョンアップを行わない理由

機関リポジトリ導入後、バージョンアップを行っていない機関に対して、その理由を尋

ねたところ、図17のとおり、「費用がない」「人員がない」「現行バージョンで満足」など回答が分散した。総合的に考えると、費用、人員、時間を掛けるほどの効果を感じられないという複合的要因が理由と考えられる。

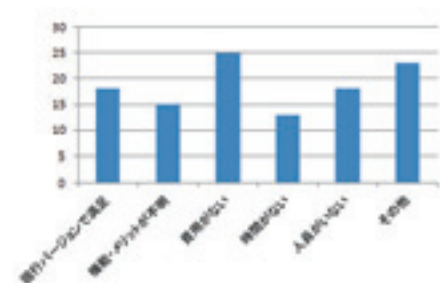


図17 バージョンアップを行わない理由

なお、理由の2位となっている「その他」については、具体的には「独自のカスタマイズを行っているためバージョンアップが容易に行えない」「バージョンアップを行うと機能が失われてしまう」といった理由が含まれていた。

⑱ 他システムへの変更の検討

他システムへの変更を検討したことがあるのは、図18-1のとおり21機関（14%）のみで、大半の機関では検討を行っていない。変更するにも、費用と労力が掛かるためと考えられる。



図18-1 他システムへの変更の検討

具体的な変更対象としては、図18-2のとおり WEKO がいちばん多かった。自由意見等を見ても、WEKO については、国立情報学研究所が提供しているという信頼感を評価している意見が複数見られた。

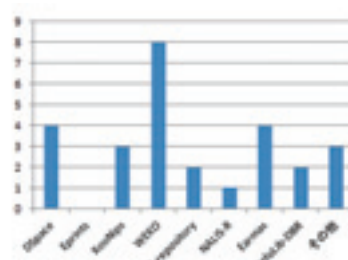


図18-2 変更対象

⑲ 学内の研究業績データベースとの連携

学内の研究業績データベースとの連携については、図19-1のとおり111機関（72%）で連携していなかった。機関種別で見ると、国立大学では30機関が連携していると回答しており、国立大学では連携が進みつつあることが分かる。

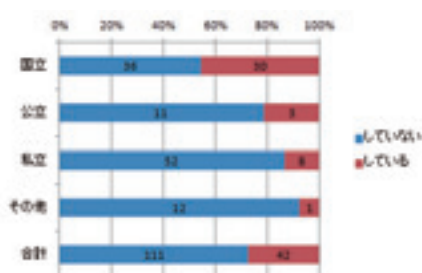


図19-1 学内の研究業績データベースとの連携

ただし、連携の内容を具体的にみると、図19-2のとおり、業績データベースとの間で具体的にデータのやり取りをするのではなく、著者識別子をキーとした相互リンクを張る形が中心となっている。

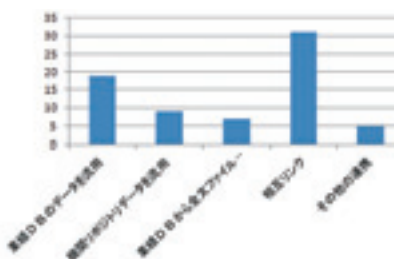


図19-2 連携の内容

⑳ 自由意見

別紙3のとおり、選択肢による回答以外に多数の自由意見が寄せられた。この中から印

象的な意見を拾っていくと次のようなものがある。

- 動向を窺っている状況。
- どの ID を使えば良いのかわからない。
- どのように進めて良いかわからない。
- DSpace だと多かれ少なかれ専門的な知識が必要になり、組織内の誰でもが管理者になれるものではない。WEKO はこういった点を解消してくれるのではないかと期待している。
- 国際標準的な ID に統一されることは良いことである。
- まずコンテンツの充実に注力している。システム改良の検討は後回しになっている。
- リポジトリに登録することで著者が得られるメリットがあまり実感できない。
- JAIRO Cloud の将来的な展望や方針の明確化を希望する。
- 著者識別子登録に関する国内的な方向性を示してほしい。

(5) まとめ

以上の結果を次のとおりまとめた。

- 「著者識別子」という用語自体は普及しつつあり、認知度は高くなっている。
- 著者識別子登録の利点についても多くの機関が認めており、今回の事業の実施意義はあったと言える。
- 著者識別子登録の利点として、「同姓同名の区別（著者の識別）」と「改姓への対応（名寄せ）」という2機能を挙げる機関が特に多かった。
- 国際的に利用できる著者識別子を目指している ORCID の内容については、十分浸透しているとは言えない。
- 著者識別子の登録を行っている機関は全体の25%程度で、今回の事業の結果、爆発的に普及させることはできなかった。
- 各機関リポジトリで著者識別子として利用している ID は機関内の研究者番号、研究者リゾルバー番号、科研費研究者番号等に

分かれている。

- 付与対象は学内の研究者にとどまっており、網羅性の点で問題が残っている。
- 著者識別子を登録した後、機関リポジトリと学内の研究業績データベースとのリンクを意図している機関が多かった。
- 著者識別子を登録しない理由として、機関リポジトリの運用に関する技術が不足している点と著者識別子に関する情報が不足している点が問題として浮き上がった。
- 機関リポジトリ用ソフトウェアとしては、DSpace が最も多かったが、私立大学を中心に WEKO の利用が増えている。著者識別子の実装を進める場合、WEKO での対応を抜きには考えられない状況になりつつある。
- 利用されている DSpace のバージョンについては、最新版になっている機関は少なく、幅広く分布している。ただし、著者識別子に対応可能なバージョン以上の機関は過半数である。
- 機関リポジトリのバージョンアップに関しては、職員が定期的実施している機関は少なく、カスタマイズの時期に合わせて外注業者が実施しているケースが大半である。
- バージョンアップを行わない理由は回答が分散した。まとめると、費用、人員、時間をかけてバージョンアップを行ってもそれほど効果がないと判断されていると言える。
- 他システムへの変更を検討している館は多くない。その中で WEKO への変更を検討している館がいちばん多かった。
- 自由意見（別紙3）では、「動向をうかがっている状況」「どの ID を使えば良いのかわからない」「どのようにすれば良いかわからない」という意見が複数見られた。著者識別子登録のメリットが実感されにくいという点と合わせ、著者識別子登録に関する国内的な方向性を示すことが求められて

いる。

2 「著者識別子に関する教員の意識調査【機関リポジトリ設置大学に所属する教員対象】」実施結果報告

(1) 調査概要

全国の機関リポジトリ設置機関に所属する研究者に対する、研究業績の管理方法及び著者識別子の必要性についての意識調査。

(2) 調査期間

平成25年1月31日～2月15日

(3) 調査方法

アンケート1で協力を得た各機関の担当者宛てに別紙4のアンケートを送付し、各機関所属教員へ協力を依頼した。回答は、Web上に作成した専用回答フォームによって行う形とした。なお金沢大学の教員については、全教員に対して、電子メールで同様の依頼を行った。

(4) 調査結果

調査結果は別紙5, 別紙6のとおりである。以下、設問ごとに調査結果を分析し、最後にまとめを行う。

① 回答者数と属性

総回答数は583件で、分野別、年代別の回答数は図20のとおりだった。

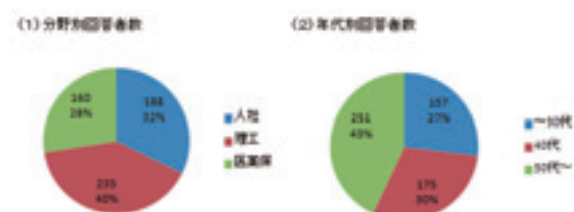


図20 属性別回答者数

なお、回答者の所属機関は次のとおりである（カッコ内は回答件数）。

金沢大学(100), 熊本大学(76), 琉球大学(72), 宮崎大学(35), 京都工芸繊維大学(32), 電気通信大学(26), 静岡県立大学(22), 東京外国語大学(20), 玉川大学(19), 広島大学(15), 長野工業高等専門学校(13), 小樽商科大学(12), 富山大学(10), 北見工業大学(9), 札幌大学(7), 長野県短期大学(7), 飯田女子短期大学(6), 新潟大学(6), 文化学園大学(6), 松本歯科大学(6), アジア経済研究所(4), 大阪府立大学(4), 専修大学(4), 東邦大学(4), 愛知教育大学(3), 滋賀大学(3), 城西大学(3), 新潟県立看護大学(3), 福井大学(3), 公立ほこだて未来大学(2), 上智大学(2), 東京医科歯科大学(2), 名寄市立大学(2), 北海学園大学(2), 和光大学(2), 国連大学(1), 札幌学院大学(1), 筑波技術大学(1), 東京女子大学(1), 名古屋大学(1), 無記入(36)

② 研究業績の管理方法

図21-1のとおり、「WordやExcelなど」「大学の業績データベース」で管理をしている割合がそれぞれ50%程度ずつで、最も割合が高かった。文献管理ソフトを利用したり、Webサイトを独自に作っている割合は低かった。「その都度作成、管理していない」という回答も3位になっており、業績管理に手間を掛けることを嫌う傾向があることが読み取れる。

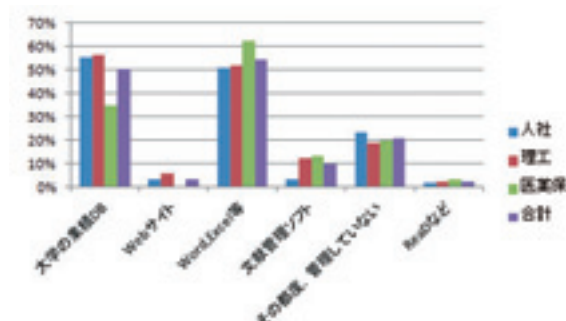


図21-1 研究業績の管理方法 (分野別)

分野別で見ると、医薬保健系で大学業績データベースの割合が低く、WordやExcel

等で管理している割合が高かった。

業績管理については、従来同様の単純な方法が好まれていることが分かった。自由意見欄での回答の傾向と合わせて考えると、教員の多忙さを反映していると言える。

年代別で見ると（図21-2）、相対的には件数は多くないが、若い研究者ほど文献管理ソフトを使っている割合は高くなっている。

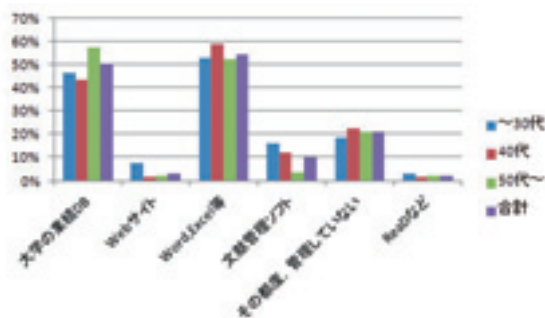


図21-2 研究業績の管理方法（年代別）

③ 自身の研究の検索の頻度

図22のとおり、「時々行う」と答えた研究者数が357件でいちばん多かった。

分野別で見ると、医薬系で自身の検索をする機会が多い。年代別では顕著な傾向は見られなかった（グラフは省略）。

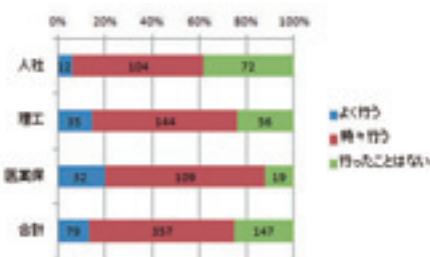


図22 自身の研究の検索を行う頻度（分野別）

その際不便に感じることがあるか尋ねたところ、図23のとおり、約半数の研究者が不便に感じるがあると回答した。分野別で見ると、理工系で不便を感じる研究者の割合が高かった。年代別では顕著な傾向は見られなかった（グラフは省略）。

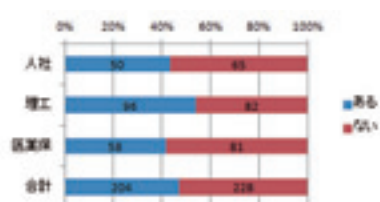


図23 自身の研究の検索をする際に不便に感じることはあるか（分野別）

どういう点を不便に感じるか尋ねたところ、図24-1のとおり、「同姓同名、またはイニシャルが同じであるため区別できない」と答えた人の割合が最も高かった。続いて、「自分の業績がまとまらない」点が続いた。

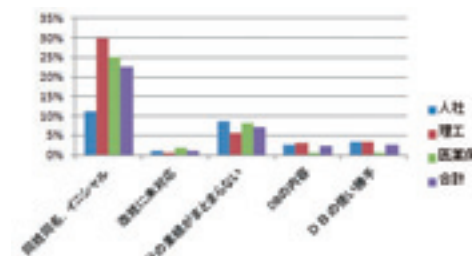


図24-1 自身の研究を検索する際、どういう点に不便に感じるか（分野別）

この結果は、アンケート1の図4に対応するものであり、提供側が予想しているとおり、研究者側も著者名の同定について不便を感じていることが明らかになった。

分野別で見ると、理工系で特に「同姓同名」について不便を感じている割合が高いことが分かる。反対に人文社会系では、非常に低くなっている。このことは、一般的に英文で研究を発表することの多い、理工系及び医薬保健系の論文について著者識別子の必要性が高いことを示唆している。

人文系については、論文の発表件数が理工系、医薬保健系より少なく、しかも日本語論文が中心であるため、相対的に不便を感じる人の割合が少ないといえる。

年代別で見ると、図24-2のとおり、50代以上の研究者で自身の業績がまとまらなさと回答する人の割合が高かった。このことは、年配の研究者については、発表件数が多い

上、データベースに収録されていない古い業績が多いことを示唆している。

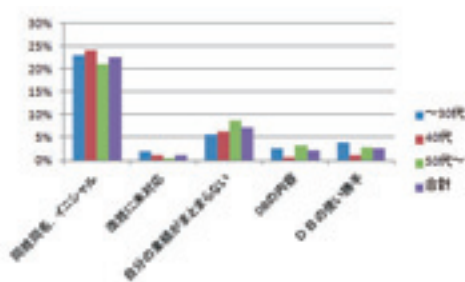


図24-2 自身の研究を検索する際、どのような点に不便を感じるか（年代別）

④ 著者 ID の必要性について

著者 ID の必要性については、図25-1のとおり、「あればよい」と答えた研究者数が347人（60%）と最も多かった。「是非必要」と回答した研究者は20%未満であり、強いニーズがある状況とは言えない。



図25-1 著者 ID の必要性について（年代別）



図25-2 著者 ID の必要性について（分野別）

図25-2のとおり、分野間での顕著な傾向は見られなかったが、年代別では、若手研究者で「是非必要」という人の数が比較的多かった。ただし、「あれば良い」と答えた人の割合は低く、積極的に必要と考える人とそうでない人が分散している傾向がある。

⑤ 著者 ID に関する自由意見

別紙6のとおり多数の意見が出された。その中で特に目立つのが、管理すべき ID がこれ以上増えることに対する危惧や手間の掛かることは行いたくない、という意見である。その一方、著者識別子を使うなら国際的なものでないと意味がないという意見も見られた。

このことから、教員の負担を増やさないためには、科研費研究者番号などの既存の ID を使った上で、研究者リゾルバーなどを介して、ORCID 等の国際的な著者識別子と連動させるような仕組みを構築することが求められていると言える。

(5) まとめ

以上の結果を次のとおりまとめた。

- 業績管理については、教員の多忙さを反映して従来同様の単純な方法が好まれている。
- 自分の論文をデータベースで検索する際に不便な点としては、研究者側から見ても著者名の同定について不便を感じていることが明らかになった。この傾向は、英文論文を執筆することの多い、理工系教員で顕著だった。
- 著者 ID の必要性については、「あれば良い」と考える研究者が大半だった。ただし、「是非必要」という強いニーズのある状況にはなっていない。

V 成果・波及効果

この事業を通じて、以下の成果を得ることができた。

- 平成22～23年度の事業を通じて、DSpaceにおいて著者識別子登録機能を機関リポジトリに実装するための手順を確立することができた（具体的な内容については、プロジェクトのサイトで公開予定）。

- 機関リポジトリへの著者識別子実装についての認知度を高めることができた。
- 平成24年度アンケートを実施することにより、著者識別子に対する担当職員及び教員の意識を把握し、課題を整理することができた。
- その結果、機関リポジトリの提供側、研究者側の双方とも、研究者をIDによって明確に区別しようという方向性については賛同しているが、その利点が大きなものとして実感されにくいいため、システムのカスタマイズを行ってまで積極的に進めようという状況になっていないという現状が明らかになった。

VI 課題及び課題解決へ向けての展望

この事業の課題と解決へ向けての展望を以下のとおりまとめた。

1 著者識別子の必要性についての理解の拡大

著者識別子の導入は、個人の特が目的である。日本の場合、同姓同名の人の場合や結婚などで姓が変わることなどの問題が想定される。この問題は外国の場合も同様に発生する問題でもある。従って、個人を特定する著者識別子があると良いとの意見が多いこと、すなわち「あると便利」の答えが多いことは容易に理解できる。しかしながら、現在は「ないと困る」という状況には達していない。

著者本人に限って考えると、自身の論文の存在は、過去に作成した論文について、個々で管理されていることが教員へのアンケートでも分かっている。更に最近では国立大学の教員（研究者）は業績データベース等で論文名等の業績の公表が浸透している。そのためにデータの整理管理が徹底されているのも当然である。これらの事実から学内に限れば識別子に頼らなくても著者の同定は可能な状況になっていると推測される。また、研究者コ

ミュニティも従来の学会の会合で顔を突き合わせるだけでなく、インターネットやSNS等の情報交換手段でかなり深く濃密になっており、相手を知る手段が多く、同姓同名等の混乱も少ないことが推測される。

以上の事から現時点では著者識別子が絶対的な必要な情報には位置づけられていない。

ただし、今後については、急速に増えつつあるアジアの研究者の状況を勘案すると、韓国や中国に多いと言われる同姓同名者の識別は重要になることが想定される。また、氏名の誤入力が発生しやすいと言われる欧州系の著者の場合、正確性を期するために著者識別子は重要である。

雑多な情報が溢れるインターネット上の情報の中から、自身の研究業績を効率よく抽出し、さらに研究者が国際的に活動を行っていくためには、世界で一意となる著者識別子を定着させることが不可欠となる。まず、そのための広報活動が求められる。

2 著者識別子の登録率の向上

著者識別子を導入している金沢大学でもそのデータの充足はかなり困難である。自大学の教員はほぼ100%充足しているが、著者の全体でみると50%を下回る。この理由は識別子番号を持っていない者がいることと、自大学以外の研究者（共著者）の著者識別子の番号を調べるために手間が掛ることが要因である。最近の研究は個人で行うことは殆ど稀で、研究者グループで行うことが殆どである。そのために論文も当然共著者がいることになる。機関リポジトリのデータ登録は殆どの場合、登録する際に自大学の者の個人識別子は容易に入力できる仕掛けであるために大きな労力を掛けずに入力できるが、他機関の研究者はその都度調べて（聞いて）入力する必要がある、大きな労力（手間）を必要とする。

識別子を持たない大学院生などについては、今後科研費番号を付す様に働きかけて充

実させることとしたい。

著者識別子の登録率の向上については、そのメリットが明確に見えてこないと改善しないと予想される。機関リポジトリに著者識別子を登録することにより、各研究者の研究業績が間違いなく正確に検索者から捕捉されるようになる、という事例を積み重ねていくことが必要と考える。

3 著者識別子として利用する番号の検討と国際的な識別子への対応

本実証実験で著者識別子に使う番号についてどのようなものが良いかも重要な課題と考えている。アンケート結果では、認知度の一番高い番号は研究者リゾルバーコードであった。二番目は科研費研究者番号と続く。

科研費研究者番号は e-Rad の番号と同じである。e-Rad 番号は認知度は低いですが政府（文部科学省）が管理する府省共通研究開発管理システムで使われている研究者に割振られた番号であり、科研費研究者番号と同一である。多くの大学では科研費はその殆どの研究者に積極的に申請するよう勧められており、今後は大学院生等にも応募の門戸を広げられることを期待したい。また、科研費にとどまらず、府省共通で使う e-Rad の番号は厚労科研や経済産業省の競争的資金、JST の応募にも必要な番号となっており、今後とも安定的に管理されることが予想されることから、共通に利用する個人識別子の番号は科研費研究者番号を推奨する。

今後、ORCID 等の世界的な著者識別子の利用が進んだ場合、各国の著者識別子間を紐づけするような作業も必要となる。具体的には、国立情報学研究所で運用している研究者リゾルバーを窓口として、科研費研究者番号を登録すれば、国際的にも通用するようになるといった安心感のあるシステムを構築することが必要である。

VII 今後の計画

最後に、この事業の今後の進め方について提案を行う。

1. 本事業終了後は、今年度まとめた課題を踏まえた上で以下の形で事業を継続することを検討し、金沢大学が担当する事業としては終了する。
2. 著者識別子の普及に関しては、国際的な著者識別子への対応へのニーズがさらに強くなると予想される。日本国内でも種々の ID が使用されている。その際、国立情報学研究所で構築している研究者リゾルバーを通じた ID 間の連携の仕組みを構築することがポイントとなる。同時に、今後、著者識別子として何を使うのが相応しいかについての実際的な運用方法についても国立情報学研究所が中心となって検討する必要があると考える。ただし、具体的な作業については、特定の機関が中心となって行うよりは、NACSIS-CAT（オンライン共同分担総合目録）のような形で国立情報学研究所を中心として、各機関が共同分担するような方式で研究者リゾルバーを充実させていく形が考えられる。
3. 今回実施したアンケートの結果、各機関の機関リポジトリ担当者の技術レベルが不足しているため、バージョンアップやカスタマイズが容易に行えない実態が分かった。この事業の終了後は、特定の大学がサポートするのではなく、国内の機関リポジトリの運用をサポートする DRF 等のコミュニティを中心とした技術的なサポート体制を構築し、普及を図る形が考えられる。
4. その一方、高度な技術を持たなくても利用可能な機関リポジトリシステムとして、国立情報学研究所で開発している

WEKO に対する期待が大きいことも分かった。WEKO における著者識別子の登録についても、国立情報学研究所を中心として検討すべき事項と考える。

今後、著者識別子を国際的にも重要な学術情報流通において必須の研究基盤として普及を図っていくためには、まず、各機関で著者識別子として何を採用すべきかについてのアナウンスが必要である。また、機関リポジトリに著者識別子を登録することで、商用データベースや電子ジャーナルに収録されている業績と同様の形で著者の識別が行えるようになり、業績を正確にまとめることができるようになるといったことをアピールし、研究者の理解を広めていくことも必要と考える。

VIII 引用文献・注記

加藤齊史, 土屋江里, 久保田壮一, 宮川謹至 (2012): ジャパンリンクセンターによるリンク管理と日本語の電子的学術コンテンツへの DOI 付与. 情報管理55 (1), pp. 42-46. (最終確認日: <http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.55.42>)

蔵川圭, 武田英明 (2011): 研究者識別子 ORCID の取り組み. 情報管理54 (19), pp. 622-631. (最終確認日: <http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.622>)

機関リポジトリへの「著者識別子」登録機能実装に関するアンケート調査

金沢大学附属図書館長

金沢大学附属図書館では、平成22～24年度「オープンアクセス環境下における同定機能導入のための恒久識別子実証実験」として、国内の機関リポジトリへの「著者識別子（著者に付与される一意のID番号，科研費番号や研究者リゾルバーIDなど）」登録機能実装を推進するためのプロジェクトを行ってきました。

今年度でこのプロジェクトを終了するに当たり、各機関の現状と課題を把握するために以下のアンケート調査にご協力ください。回答は、各機関の機関リポジトリ担当者の個人の意見でも結構です。

■回答締め切り：平成25年1月21日（月）

■アンケートの返送方法

（方法1） FAX または郵送にて金沢大学附属図書館宛てに返送

（方法2） 以下のサイトに掲載してある「アンケート調査票」に記入の上，以下までメール添付で返送

－アンケートサイト

URL： <http://www.lib.kanazawa-u.ac.jp/kura/maidentity/>

－返送先メールアドレス： yhashi@adm.kanazawa-u.ac.jp

■問い合わせ 金沢大学附属図書館（担当：情報企画課 橋，藤原）

e-mail： yhashi@adm.kanazawa-u.ac.jp 電話：076-264-5217

1 著者識別子について

【問1】 機関リポジトリに著者識別子（著者に付与される一意のID番号，科研費番号や研究者リゾルバーIDなど）を登録できることをご存知でしょうか？

1= 知っている 2= 知らなかった 3= その他（ ）

【問2】 機関リポジトリに著者識別子を登録する利点はあると思いますか？

1= ある 2= ない 3= 分からない

【問3】 【問2】 で「1= ある」とお答えの機関にお尋ねします。どういう点が特に利点だと思いますか？（複数回答可）

- 1= 同姓同名の著者を識別できる点
- 2= 複数の名前を持つ著者（改姓、表記のユレ等）の論文をまとめられる点
- 3= 機関内の研究者データベース等と連携する際に活用できる点
- 4= 研究成果を一元管理する際に有効な点
- 5= 業績評価に活用できる点
- 6= 国際的な動向に対応できる点
- 7= その他（ ）

【問4】 国際的な著者識別子である ORCID の概要についてご存知ですか？

- 1= 知っている
- 2= 名前は聞いたことがある
- 3= 知らない
- 4= その他（ ）

【問5】 貴機関の機関リポジトリに著者識別子を登録していますか？

- 1= 登録している
- 2= 登録予定（時期： ）
- 3= 登録していない
- 4= その他（ ）

※ 1, 2 の場合 → 【問6】 へ / 3, 4 の場合 → 【問7】 へ

【問6】 著者識別子を「1= 登録している」「2= 登録予定」とお答えの機関にお尋ねします。

【問6-1】 著者識別子として何を利用してありますか？（複数回答可）

- 1= 科学研究費研究者番号（e-Rad 研究者番号）
- 2= 研究者リゾルバー I D
- 3= 文部科学省共済番号
- 4= その他の機関内の研究者番号
- 5= その他（ ）

【問6-2】 【問6-1】 の著者識別子はどのメタデータフィールドに登録していますか？複数ある場合は、それぞれご記入ください。（例）dc.identifier.kaken（金沢大学の場合）

（ ）

【問6-3】 どういう身分の著者に著者識別子を登録（または登録予定）していますか？（複数回答可）

- 1= 機関内研究者
- 2= 学内院生
- 3= 学内学生
- 4= 機関外の共著研究者
- 5= 全著者
- 6= その他（ ）

【問6-4】複数著者がいる論文・記事の場合、各著者と著者識別子に対応する形で登録されていますか？（過去の遡及登録分は除く）

- 1= 機関内外を問わず、各著者に対応する形で著者識別子を登録している
- 2= 機関内研究者のみ、各著者に対応する形で著者識別子を登録している
- 3= 筆頭著者等一部に著者識別子に対応する形で登録している
- 4= その他（ ）

【問6-5】著者識別子を活用して、他データベース等へのリンクを張っていますか？

- 1= はい（または予定がある） → 具体的なデータベース名（複数回答可）
 - a= 機関内の研究者DB
 - b= 研究者リゾルバー
 - c= JAIRO
 - d= その他（ ）
- 2= いいえ
- 3= その他（ ）

【問6-6】どういう範囲で著者識別子の登録を行っていますか？【複数回答可】

- 1= 新規登録分のみ
- 2= 遡及的に登録している
- 3= その他（ ）

【問6-7】著者識別子の登録に関して問題点等があれば、自由にご記入ください。

→ 【問8】へ

【問7】著者識別子を「3. 登録していない」「4. その他」とお答えの機関にお尋ねします。著者識別子を登録されていない場合、その理由についてお書きください。（複数回答可）

- 1= 必要性がない
- 2= 登録する手間が増える
- 3= ふさわしいIDがない
- 4= 登録するためにカスタマイズが必要
- 5= 登録できるメタデータフィールドがない
- 6= どうすれば使えるようになるか分からない
- 7= その他（ ）

2 貴館の機関リポジトリについて

【問8】機関リポジトリシステムの名称をお書きください。

（ ）

【問9】 機関リポジトリ用のシステムとして何をご利用ですか？可能な範囲で（ ）内にバージョン（例：DSpace 1.6等）をお書きください。

- 1= DSpace () 2= Eprints () 3= XooNips ()
4= WEKO () 5= E-repository () 6= NALIS-R ()
7= Earmas () 8= InfoLib-DBR ()
9= その他 ()

【問10】 【問9】 で「1= DSpace」をご利用とお答えの機関にお尋ねします。DSpace1.5 以上では、著者識別子の取扱いが容易になる機能があることをご存知ですか？

- 1= 知っている 2= 知らない 3= その他 ()

【問11】 機関リポジトリのシステムのバージョンアップは行っていますか？

- 1= 定期的を実施 2= カスタマイズの際などにあわせて実施
3= 導入後行っていない 4= その他 ()

【問12】 【問11】 で「1= 定期的を実施」「2= カスタマイズの際などにあわせて実施」とお答えの機関にお尋ねします。バージョンアップの作業はどのような形で行いましたか？（複数回答可）

- 1= 図書館職員が実施 2= 機関内のシステム担当者が実施
3= 機関内の研究者、大学院生等が実施 4= 外注で業者が実施
5= その他

【問13】 【問11】 で「3= 導入後行っていない」とお答えの機関にお尋ねします。バージョンアップを行わない理由を教えてください。（複数回答可）

- 1= 現行のバージョンで満足 2= バージョンアップ後の機能・メリットが不明
3= 費用がない 4= 検討・作業する時間がない 5= 検討・作業できる人員がない
6= その他 ()

【問14】 現在、使用されている【問9】のシステムについて、他のシステムへの変更を検討したことはありますか。

- 1= ある 2= ない 3= その他 ()

機関リポジトリへの「著者識別子」登録機能実装に関するアンケート 集計結果

設問	選択肢	国立	公立	私立	短大高専	その他	共同	合計 (%)
回収率	回答数	66	14	61	6	5	2	154
	未回答数	16	4	24	2	6	6	58
	回答率	80.5%	77.8%	71.8%	75.0%	45.5%	25.0%	72.6%
	配布数	82	18	85	8	11	8	212
【問1】 著者識別子について	1=知っている	53	10	45	2	5	2	117 76.0%
	2=知らない	13	4	15	4	0	0	36 23.4%
	3=その他	0	0	1	0	0	0	1 0.6%
【問2】 著者識別子登録の利点	1=ある	55	12	55	6	5	2	135 87.7%
	2=ない	0	0	1	0	0	0	1 0.6%
	3=分からない	7	1	4	0	0	0	12 7.8%
【問3】 著者識別子登録のメリット (複数回答可)	1=同姓同名著者の識別	55	11	54	6	4	2	132 97.8%
	2=改姓等への対応	50	11	49	5	4	2	121 89.6%
	3=研究者 DB との連携	35	3	29	1	1	1	70 51.9%
	4=研究成果の一元管理	23	5	30	0	2	0	60 44.4%
	5=業績評価への活用	9	2	10	0	0	0	21 15.6%
	6=国際的な動向への対応	5	0	10	2	2	0	19 14.1%
	7=その他	2	0	2	1	0	0	5 3.7%
【問4】 ORCID について	1=知っている	13	3	9	1	2	1	29 18.8%
	2=名前だけ	30	4	19	2	0	0	55 35.7%
	3=知らない	18	6	31	3	3	1	62 40.3%
	4=その他	0	0	0	0	0	0	0 0.0%
【問5】 著者識別子の登録実施	1=登録している	19	5	8	0	0	0	32 20.8%
	2=登録予定	5	0	1	0	0	0	6 3.9%
	3=登録していない	41	9	52	6	5	2	115 74.7%
	4=その他	1	0	0	0	0	0	1 0.6%
【問6-1】 著者識別子として利用している ID (複数回答可)	1=科研費研究者番号	5	1	5	0	0	0	11 28.9%
	2=研究者リゾルバー ID	9	3	2	0	0	0	14 36.8%
	3=文部科学省共済番号	4	0	0	0	0	0	4 10.5%
	4=機関内の研究者番号	10	1	3	0	0	0	14 36.8%
	5=その他	5	2	1	0	0	0	8 21.1%
【問6-3】 著者識別子の付与対象 (複数回答可)	1=機関内研究者	23	3	4	0	0	0	30 78.9%
	2=学内院生	2	0	0	0	0	0	2 5.3%
	3=学内学生	1	0	0	0	0	0	1 2.6%
	4=機関外の共著研究者	0	0	0	0	0	0	0 0.0%
	5=全著者	0	1	4	0	0	0	5 13.2%
	6=その他	2	1	1	0	0	0	4 10.5%
【問6-4】 複数著者についての登録	1=各著者に対応する形で登録	2	1	3	0	0	0	6 15.8%
	2=機関内研究者のみ対応して登録	17	3	5	0	0	0	25 65.8%
	3=一部著者のみ対応する形で登録	2	1	1	0	0	0	4 10.5%
	4=その他 (検討中)	2	0	0	0	0	0	2 5.3%
【問6-5】 他 DB へのリンク	1=はい、予定あり	18	3	5	0	0	0	26 68.4%
	a=機関内の研究者 DB	14	2	4	0	0	0	20 76.9%
	b=研究者リゾルバー	8	1	2	0	0	0	11 42.3%
	c=JAIRO	1	0	1	0	0	0	2 7.7%
	d=その他	3	0	0	0	0	0	3 11.5%
	2=いいえ	6	2	3	0	0	0	11 28.9%
	3=その他	0	0	0	0	0	0	0 0.0%
【問6-6】 著者識別子の登録範囲 (複数回答可)	1=新規登録分のみ	13	4	4	0	0	0	21 55.3%
	2=遡及登録も実施	13	3	6	0	0	0	22 57.9%
	3=その他	5	1	1	0	0	0	7 18.4%

設問	選択肢	国立	公立	私立	短大高専	その他	共同	合計 (%)
【問7】 登録していない理由 (複数回答可)	1=必要性がない	2	1	3	1	0	0	7 6.0%
	2=登録する手間	10	1	8	1	1	0	21 18.1%
	3=ふさわしいIDがない	8	1	6	0	0	1	16 13.8%
	4=カスタマイズが必要	21	1	15	1	1	2	41 35.3%
	5=メタデータフィールドがない	13	0	7	0	1	0	21 18.1%
	6=使えるようにする方法が不明	11	5	14	2	0	0	32 27.6%
	7=その他	10	2	16	2	3	0	33 28.4%
【問9】 機関リポジトリシステム	1=DSpace	43	7	23	0	2	2	77 50.0%
	2=Eprints	0	0	1	1	0	0	2 1.3%
	3=XooNips	1	2	6	0	1	0	10 6.5%
	4=WEKO (JAIRO Cloud)	2	4	22	5	0	0	33 21.4%
	5=E-repository	3	0	3	0	0	0	6 3.9%
	6=NALIS-R	9	0	0	0	0	0	9 5.8%
	7=Earmas	4	0	0	0	0	0	4 2.6%
	8=InfoLib-DBR	2	1	4	0	1	0	8 5.2%
	9=その他	2	0	2	0	1	0	5 3.2%
【問10】 DSpace1.5以上での利用可能性	1=知っている	19	1	8	0	1	2	31 40.3%
	2=知らない	26	7	15	0	1	0	49 63.6%
	3=その他	0	0	0	0	0	0	0 0.0%
【問11】 システムのバージョンアップ	1=定期的実施	2	3	6	1	0	0	12 7.8%
	2=カスタマイズ時等に実施	20	1	7	1	0	0	29 18.8%
	3=導入後行っていない	34	4	27	1	4	1	71 46.1%
	4=その他	8	6	20	3	1	1	39 25.3%
【問12】 バージョンアップ作業	1=図書館職員	4	0	5	2	0	0	11 26.8%
	2=機関内システム担当者	2	1	4	0	0	0	7 17.1%
	3=機関内の研究者、大学院生等	0	0	0	0	0	0	0 0.0%
	4=外注業者	17	4	6	0	0	0	27 65.9%
	5=その他	0	1	4	0	0	0	5 12.2%
【問13】 バージョンアップを行わない理由 (複数回答可)	1=現行バージョンで満足	5	1	12	0	0	0	18 16.4%
	2=機能・メリットが不明	8	0	5	0	1	1	15 13.6%
	3=費用がない	13	1	7	0	3	1	25 22.7%
	4=時間がない	5	1	6	0	1	0	13 11.8%
	5=人員がいない	10	0	6	1	1	0	18 16.4%
	6=その他	11	1	9	0	1	1	23 20.9%
【問14】 他システムへの変更の検討	1=ある	13	2	4	1	1	0	21 13.6%
	2=ない	46	11	59	5	4	2	127 82.5%
	3=その他	3	0	1	0	0	0	4 2.6%
【問15】 どのシステムに変更?	1=DSpace	2	0	2	0	0	0	4 19.0%
	2=Eprints	0	0	0	0	0	0	0 0.0%
	3=XooNips	1	0	2	0	0	0	3 14.3%
	4=WEKO	5	1	2	0	0	0	8 38.1%
	5=E-repository	1	0	1	0	0	0	2 9.5%
	6=NALIS-R	1	0	0	0	0	0	1 4.8%
	7=Earmas	2	0	0	1	1	0	4 19.0%
	8=InfoLib-DBR	1	0	1	0	0	0	2 9.5%
	9=その他	2	1	0	0	0	0	3 14.3%
【問16】 研究業績DBとの連携	1=していない	36	11	52	6	4	2	111 72.1%
	2=している	30	3	8	0	1	0	42 27.3%
	a=業績DBのデータを流用	14	0	4	0	1	0	19 45.2%
	b=機関リポジトリデータを流用	7	0	2	0	0	0	9 21.4%
	c=業績DBから全文ファイル転送可	6	0	1	0	0	0	7 16.7%
	d=相互リンク	23	3	5	0	0	0	31 73.8%
e=その他の連携	3	0	1	0	1	0	5 11.9%	

著者識別子実装に関するアンケート 自由記述欄に書かれた意見

問3 著者識別子の利点

- 著者識別子の存在意味を考えると研究者と一対のもの。登録するのは当然。
- 現在所属している教員が他所属または学生時代に掲載されているものも併せて調べることができる。
- 多くの機関が対応すれば JAIRO で集約されることにより機関を超えて研究成果を一元活用できる点。
- リポジトリ等（今まであった保存先）が無くなってしまった場合自機関 IR 内で名寄せができる。

【問6-7】著者識別子に関する問題点

- 研究者総覧とリンクしているが、教員が退職すると研究者総覧の該当ページがなくなるため、リンク切れが発生する。
- 研究者の人事異動に合わせ、日本語研究者名・英語研究者名・科学研究費研究者番号・学内研究者 DB の ID の対照表を更新する必要がある。
- 何を著者識別子として利用すべきかに迷う。どれを選んでも一長一短があり。
- 現在は一部の学内研究者分のみ、試行的に登録している段階。著者項目を繰り返して持てない構造のため、複数著者には対応できない。現在は研究者リゾルバーへのリンクのみ実現している。
- 研究者の異動に対応する国際的な ID の利用と利用するための支援システムが必要と考えられるが、現状では最適なシステムが存在しない。このため本学では、在籍研究者のみの登録を行っているが、ローカルな ID を使うため執筆者全員の登録を行うことが出来ない。また、学生については、学籍番号の使用を検討しているが、ローカル ID となり今後研究者となった場合には、別途 ID が必要となるため複数の ID を使う懸念がある。これらを踏まえた、著者典拠となる ID 管理システムの構築が望まれる。
- 本学に在籍しているが、機関内研究者 DB に登録されてない職員が多い。業績 DB へリンクを張っているが、本学を退職した後のメンテナンスが問題。
- CiNii の場合、同一人物でも複数の ID がある場合が多く、特に本学在籍中のものに限って、同一人物として ID を統合してもらった。だが、明らかに同一人物だとわかっているにもかかわらず、そのままになっている。したがってまだ一人にたくさんの ID がある方がいる。これは、今後、統合していった方がよろしいかと思います。
- 本学では著者識別子として研究者リゾルバー ID のみを用いているため、ID を持っていない著者には識別子が付与できていません。機関で独自の番号を付与する際、どのような番号を付与すればよいのか、他機関の事例を知りたいです。
- やはり登録や定期的な見直しには手間がかかります。
- 学内で採番しているため公的な ID ではない。
- 公開して 1 年もたたないにもかかわらず、既にデータにバラツキがあり、どこまで綺麗にそろえるべきか、著者識別子に関しても苦慮しているところです。
- 遡及的に登録する際、著者と著者識別子との同定が困難な場合がある。
- 研究者リゾルバー ID の元となった科学研究費研究者番号において、同一著者が複数の ID で

登録されているケースがあった。

- 著者識別子を検索しようとする、応答がかえってこない場合がある。
- システムの問題で複数登録できないため止むをえず、上記の措置。定まった所属を持たない研究者の登録も検討しているが、研究者リゾルバーへの簡単な登録が実現しないと難しい。その辺の問題が解決したら取り組みたい。
- 新規アイテム登録時に既に登録されている著者と同一人物か否かの識別に手間がかかる時がある。
- 一旦ダミー ID を与えた著者が科研費番号を持った時にデータ更新が一括処理できず、手間がかかる。自機関所属でない著者の科研費番号調査に手間がかかる。

問7 著者識別子を登録していない理由

- 著者識別子が複数あり何を利用してよいかわからない、検討が必要(12 件)。
- 著者典拠レコードの登録が負担になるのではないかと、登録作業に割く時間・人手がない(6 件)。
- 知らなかった、考えていなかった。あればとてもいいとは思いますが、どのように進めて良いかわからない(6 件)。
- DSpace のバージョンが低く、著者識別子を登録する機能がないため(5 件)。
- そもそも考えになかった。
- JuNii2 ガイドラインに記載がない。
- 現在登録されているデータについて、同姓同名の著者の区別が困難。
- 規格が統一され、運用が始まった際に、異なる ID 体系になってしまい、場合によってはこれまでの登録が無意味になる可能性も考えられる。
- 学内の研究者データベースとの連携について調整が必要。
- 地域内の医療機関発行誌収集に重点を置いていたため。
- 重要性を認識していなかった。
- 現在、構築途上のため。
- 動向を窺っている段階。
- 機関リポジトリを立ちあげたばかりなので、著者識別子導入の検討まで進んでいません。
- 業績データとのリンクが課題ではあるが、学内他部署との調整が必要となるため。
- どの識別子を使用するか決めかねている。
- 著者が認識していない。
- 著者識別子についての知識が浅いため、入力できる場所はあるようですが入力できずにいます。
- 共同リポジトリへの参加のために権限が本学になく、詳しくは分からない。
- 著者 ID の種類の違いによる動向などを含め、今後どのように入力するか検討したいと考えている。
- リポジトリを立ち上げたばかりで、手つかずのままになっている。
- メタデータとして一般的とされる番号が淘汰されてから付与したい。
- 仮公開の状態、まだそういった点を検討するまで話がまとまっていない。
- 機関内の連携データベースとの調整が必要。
- 各施設にまかせているので、登録しているかもしれません。

問13 導入後行っていない理由 その他

- リース契約のため仮に職員が作業してもその後は自己責任となるため。
- パッケージシステムで、バージョンアップがない。
- 導入後まだ間がないため(2件)。
- バージョンアップ後に不具合がでないか心配、また費用が必要かもしれないので、どうしてもやらなければならない場合に限る。
- カスタマイズを多くしているため、移行に費用がかかる。
- ベンダーが現時点で対応不可。
- バージョンアップ前特有の機能がある。
- バージョンアップのリソースがない(そもそもバージョンというものがない?)。
- 次回図書館業務システムリプレイス時に予定。
- NALIS-Rにはバージョンアップがないため。
- バージョンアップによる不具合が心配。
- カスタマイズ導入のため、バージョンアップが難しい。
- 独自のカスタマイズがあることから、バージョンアップ可否の調査が必要なため。
- まだ導入して間もないため(1年弱)。
- カスタマイズとあわせて実施するよう検討中。
- バージョンアップすると、導入時に実施したカスタマイズが失われることとなり、バージョンアップすることのメリットとデメリットを検討した結果、バージョンアップはしないこととした。
- 現在検討中のため。
- 今年度導入したばかり。
- NIIの共用リポジトリを利用しているため。
- リポジトリを立ち上げたばかりのため。
- まだ正式公開にも至っておらず、コンテンツ登録の方を優先している。

問14 他システムへの移行の検討

- 地域共同リポジトリとしては検討している。
- DSpaceからの変更。
- 検討中。

問15 どのシステムへの移行を検討したか?その理由

- 導入している図書館システムと同メーカーのもの(名称不明)。
- 図書館業務システムへの統合。
- JAIRO Cloud。
- 日本語検索機能の向上や一覧表示の充実などが期待できるため。また、コンテンツ登録など処理速度の高速化が期待できるため。

■理由

- 登録作業の軽減化による改善。画面入力時及び、マニュアル類における日本語対応の改善。
- カスタマイズのしやすさではDSpaceが上回っていると考えられるが、機能向上の頻度、システムの不具合対応業務などの軽減などの効果を考慮するとWEKOに優位性があるとみなせ

るため。

- ユーザーインターフェースがわかりやすい。NII で開発しているという安心感。管理面においてDSpace よりも簡便なのではないかという期待感。JAIRO Cloud に参加できるのなら参加したい。
- 検討といっても項目移行のための比較など具体的なことはしていませんが、NII 共用リポジトリのWEKO と、所蔵資料の画像データベース移行の関連でInfoLib-DBR は担当者の話題に上ったことがあります。
- これまで図書館職員が、リポジトリシステムの構築と保守をおこなってきた。2013年3月以降はリポジトリシステムの保守の安定化と担当職員の負担軽減を図るため、新図書館業務システムと一括調達したNALIS-R に移行する予定である。
- DSpace はコンテンツ一括登録機能をはじめとするコンテンツ・マネジメント機能が貧弱で、私どもの運用実態に合致しない場合があるため。
- 研究業績連携や博士論文収集のための学内システム連携を簡便するためと学内発行紀要について電子ジャーナリ的な見せ方を検討している。現行のE-Repository では、登録者ID を個別に作成する必要が有る（統合認証の利用ができない）ことや表示が固定的で柔軟性にかける面がある。本学では、リポジトリ専門の部署があるわけではないため業務の省力化と収集利用に効果的な表示が重要と考えている。
- 本学のデジタル貴重資料公開システムの導入予定ソフトウェアおよび別途管理している共同リポジトリの次期ソフトウェアとして検討中のため。
- システム導入してもらった業者とメンテナンス契約をしておらず、不具合が生じた場合の相談先があいまいになっていたため、図書館システム更新時に、リポジトリ機能を含んだ更新を見積試算したが、価格面で折り合いがつかなかった。
- メタデータ・本文データ管理機能を図書館業務システムへ統合することで、管理及び運用コストの合理化を図るため。図書館業務システムで提供しているパーソナル・サービス、ディスカバリ・サービスとユーザーインターフェースを統合することで、アクセス経路を整備するため。
- Windows に対応したシステムへ変更したいと考えたため。
- システム更新時に、DSpace はバージョンアップがあるため、候補にあげた。
- 図書館システム機種更新に合わせて、NALIS-R (DSpace1.6 以上へ) のバージョンアップを希望していたが、当初は業者に断られたため、DSpace へのシステム変更を検討した。その後、業者から機種更新後2年間の猶予があれば対応するとの回答があり、経費節減の為もあり、現状のシステムを引き続き使用している。
- NII が提供しているサービスのため。
- 使い勝手がよさそうと思ったから。
- 構築しやすそうであること。地域共同リポジトリが移行を検討していること。
- システムリプレースのため。
- ディレクトリー型の情報提示の変更ができないため。
- 研究所内でシステムの維持・更新ができる要員がいないため、DSpace SaaS 版に変更することを決定した。

問17 自由意見

- システム管理のうち死活管理は外注ですが、それ以外は職員が対応しています。職員の知識不

足のため、バージョンアップ、研究業績 DB 連携、RePEc 対応など進んでいないのが課題です。

- システム管理に明るい専門の担当がおらず、外注に頼らざるを得ない。そのため、こまめなカスタマイズやトラブルへの対応ができていない。
- 専任でシステム管理担当を配置できる体制ではないので、今後の維持管理体制を模索中。
- 現在、本大学の研究業績データベースのバージョンアップ計画に伴い、機関リポジトリとのデータ間にリンクを張る予定で検討中ですが、図書館の現段階では検討・作業に詳しい担当者がいないため、なかなかすまないといい状況にあります。また、リポジトリサーバの更新の時期にあるにもかかわらず、予算のめどがたたないことも困った状況です。
- DSpace だと多かれ少なかれ専門的な知識が必要になり、組織の中の誰でもが管理者になれるものではないと感じる。日本で NII という信頼ある機関が開発する WEKO は、こういった面を解消してくれるのではないかと大変期待している。
- 本学ではハードウェアの更新が最大の懸案事項ですが、OS 等が最新バージョンになると本学の現行バージョンのリポジトリソフトウェアは載せられないこと、また機能的にも十分ではないことから他システムへの移行が必要と考えています。今後、JaLC によるリポジトリコンテンツへの文献識別子付与への対応も必要になると考えられますので、DSpace だけでなく多様なシステムの、新しい技術への対応(検討)状況に関する情報を共有できたら良いと思います。
- コンテンツの登録作業時間が足りないので、できるだけ登録作業に注力しようと考えています。そういう意味で、システム改良の検討は後回しになります。
- DSpace を導入・保守している業者と、研究者 DB との連携のため DSpace のシステム改修を行った業者が別であり、バージョンアップする際、業者間の調整や著者識別子の持たせ方について検討する必要がある。
- 機関リポジトリを主業務としている係ではないので、どうしても片手間仕事となり、場当たりの対応になりがちである。必ずしもシステムに詳しいものが担当になるわけではなく、技術的情報の入手や理解が不足している。そのため、外部の状況に対応して、積極的に機能の改善や拡張につなげていくことが難しい。
- システムに詳しくないので、ほぼ業者さん任せになっていることが、やや不安です。
- 機関リポジトリのメタデータに大学独自の著者 ID を付与していますが、機関内の研究業績 DB と機関リポジトリのデータ間のリンクのみに使用しているため、このアンケートが指す著者識別子ではありません。機関内研究者（機関内の研究業績 DB に掲載されている研究者）が対象で、複数著者の場合は機関内研究者のみ、各著者に対応する形で著者識別子を登録しています。複数ある著者識別子の動向を注視しながら、次回のリポジトリシステムバージョンアップでは検討の対象になると思いますが、大学独自の著者 ID と連携する仕組みが必要です。
- 担当者のリポジトリに関する知識が不足している。他の業務と兼務なため、リポジトリ業務に割ける時間が限られている。リポジトリ登録することで著者が得られるメリットがあまり実感できない。(教員へ登録を呼びかける際、強力なメリットが見当たらない。)
- 複数の業務を抱えながら機関リポジトリ事業を推進するためには、システム管理にかかる業務コストは出来るだけ低減させ、OA 推進のための啓蒙活動やコンテンツ充実のための営業活動に注力出来ればと考える。
- リースシステムで運用を行ってきたが、経費面での制約もあり柔軟な変更が難しいこともあり、別システムへの移行を考えているが、やはり継続的運用を考えた場合に経費面で問題が生

じる可能性がある。専属スタッフを用意できない状況を考えるとシステム面の継承に問題が残り今後のリプレイス等（業績連携を行っているため相手方システムも課題）で支障が出る可能性がある。

- 技術的な専門知識が必要という点でサーバやシステム管理を図書館職員が行うことに負担がある。
- 問 16 については、研究業績 DB=教員 DB として回答している。問16 の a については、教員 DB 登録時は流用ではなく、必要項目のみリポジトリに登録できるよう、双方の仕組みに作り込みを行っている。また、リポジトリへの登録は必須ではない。問16 の c については、教員 DB は全文ファイルを保持しないため、リポジトリにのみ、本文を登録する仕組みとしている。問16 の d は、教員 DB からリポジトリへのリンクはされるが、リポジトリからのリンクは存在しない。
- 共同リポジトリとして運用しているが、機関毎のログ仕分けが自動でできない。研究業績 DB との連携が課題。
- 問 16 について、研究業績 DB から機関リポジトリ登録用の全文ファイルが届くことがあるが、出版社版 PDF や抜き刷り PDF が届くことが多く、リポジトリに登録できることは稀である。
- 平成 25 年度中に NALIS-R (DSpace2.0) へのバージョンアップを予定していますので、その際には、貴プロジェクトの「著者識別子」登録機能はぜひ導入したいと考えております。いろいろとお尋ねすることもあるかと思いますが、どうぞよろしく申し上げます。
- 本学リポジトリシステムには、著者識別子を設定していません。著者識別子を用いて、研究者総覧 DB 等の外部システムとの連携により、ユーザーに提供する新たなサービスができる可能性をあらためて感じました。
- Dspace1.4 を別事業で導入していたため、メタデータ入力費用だけで済むということでリポジトリを構築したが、1.4 と1.5 では機能に雲泥の差があり驚いた。コンテンツは地道に増やすことができるが、バージョンアップができなければ、リポジトリが宝の持ち腐れになることを懸念している。
- 現在はシステムに関する改変やカスタマイズは全て業者に一任しているが、せめてデザインとかのカスタマイズぐらいは、こちら（図書館）でできるようにになりたい。そのための DSpace 講習会（本当に初心者向け）とかあれば参加したい。
- 人員が不足している。片手間にやっているような状況でバージョンアップを検討する時間がとれないことが問題です。業務委託内容にリポジトリ管理まで含めるかどうか悩みます。現在のシステムでは著者識別子について共著がいる場合のデータが並列で作成、リPEATブルになっていないので(セット)著者識別子管理がむずかしい。
- JAIRO Cloud へのデータ登録についての理解だけで精一杯という状態で、基本的な知識が足りないと感じている。
- 特にありません。
- 本学は、NII の JAIRO Cloud を利用しているのですが、かゆいところに手が届かない感じですが、しかしながら、自館でサーバを立てるほどのものでもないもので、それなりに使っているというのが実情です。著者識別子については、風の噂程度で聞いていたのですが、現在の WEKO の機能ではすでにアップしているデータへの自動（半自動？）的な付与は困難かと思えます。

- JAIRO Cloud に参加しており、NII がメンテナンス等を担ってくれているため運用が容易である。リポジトリサイトのトップページから各コンテンツにアプローチする人は少ないため、サイトの見栄え等にそんなにこだわる必要性はない。全大学が同様の仕組みを利用するようになれば効率的だと思う。
- <ここで書かれる内容は私見にあたります。>○識別子の普及は大切だと思われます。論文資料の識別や著者の識別が国際標準な ID で統一的に検索しやすくなるのはとても良い事だと思っています。科研費など少なくとも日本の主権者からお金を受け取った以上はその成果を主権者に還元するのは自明の理だとも思われます。その意味で、オールジャパンでこの識別子を付番する事を「研究分野・内容・業績に限って」積極的に推進されることを望んでいます。
- JAIRO Cloud により当館でも機関リポジトリを起ち上げられたことは良いことだが、システム管理が簡易になった分だけ DSpace ユーザーとの「前提知識」の隔たりを感じている。機関というより、個人によるものなのか。機関内に研究業績データベースがなく、学内から必要性を唱える声もないが、このままで良いのだろうか。また、新たに起ち上げることになった場合、詳細について分からない。JAIRO Cloud にもコミュニティはあるものの導入後間もないこともあり、試行錯誤の連続であることと、使うとよい機能も、十分に活かし切れていない部分がある。
- NII が運用を開始している JAIRO Cloud の将来的な展望が不明であり、方針の明確化を希望する。
- システムは DSpace1.5.2 を使用 (PDF フィルターは PDFFilter0.7 を使用) している。PDF にはセキュリティを設定せず、テキスト検索できるものを登録しているが、テキストの抽出でエラーを起こし、全文検索に対応できないファイルがいくつもある。PDF フィルターのバージョンアップを検討しているが、今までテキストの抽出が正しく行われていたファイルでエラーが起こる可能性もあると言われている。検証にはお金と時間がかかるため、未対応の状態。
- 人員が枯渇する中でシステム管理は大きな負担。図書館システムの一機能としてとらえる方がシステム管理としてはベターである。
- おことわり： 当館では JAIRO Cloud で提供されている WEKO を利用して公開しており、独自で WEKO を運用しているわけではありません。この点がゆえに選択肢を絞りがたかった設問には、※印をつけて回答させていただきました。同様のケースについて回答が不統一となる場合は、必要に応じてお読み替えいただければ幸いです。
- 特に問題ない。大事なことはシンプルにコンテンツをアップすることにつきる。社会の多くの人々が検索エンジン (google などの) を利用しており、①まずは自分の大学の HP にしっかりアップすること。②データのバックアップをとること。アジア等世界には押される日本の実情を踏まえ、各研究分野の最新データのアップに力を注ぐ必要がある。
- NII の JAIRO Cloud を利用させていただいています。簡単に公開できた半面、どこでどう動いているのかメタデータの吐き出しについても、恥ずかしながら、はっきりと理解できていないところもあります。著者識別子についても利用したいという要望を NII に出す必要があるかと思いますが、どのように世の中が動くのか、どのように要望を出していいのかがわからない状態です。今回プロジェクトの成果として利用の指針を公表していただければありがたいです。
- 遡及入力時の著作権処理が進まない。

- リポジトリに対する理解が少ないのと、職員が少ないため、日々の教務でなかなかリポジトリ関係に係わることができません。
- どうか公開はできたものの、リポジトリを専門に扱う部署があるわけではないのでなかなか時間が取れず、作業が思うように進まない。センターには他にもデータベースが複数あり、それらとどういった差別化、または統合を図るべきか検討中。
- 全文ファイルは研究業績DB側で保存し、機関リポジトリでは全文ファイルへのリンクを表示。
- ノウハウの継承・複数の改修作業によって以前の改修部分が無効になってしまうことが発生したため、プログラム及び環境設定ファイルのバージョン管理・システムバージョンアップ、プログラム改修の予算措置。
- 機関リポジトリに限ったことではないが、メタデータについて、研究成果を表現する手段である以上、特殊文字（化学式等の上付、下付文字）や数式、記号等がより広く扱えるようになって欲しい。
- DSpace ソフトウェアの安定稼働に係る部分、およびサーバに係るハードウェアの維持管理に関しては、機関全体の維持運用管理を担当する部署、情報システム課の理解と協力を得てお任せしているが、カスタマイズとなると外注するしかない。

システム管理を任せる人材がいらないし、かつ人材を育成する余裕も無い。予算取りをして経費をかけて外注してカスタマイズをした。上位バージョンにはその機能が含まれていると売り込まれても、かけた外注経費が無駄になると感じられるし、そこを上司から指摘されると思われる。事実、委員会ではそのように言われて却下されたので、今更バージョンアップをする意味は無いと思える。また、それだけの経費をかけるなら、そのお金でデジタル化を外注する方が、よほど周囲の理解を得られると考えられる。WEKO に乗り換えたいと思うことがある。

著者識別子に関する教員の意識調査 集計結果

(1)分野別分析

総数	人社	理工	医薬保	合計
	188	235	160	583

設問	選択肢	人社	%	理工	%	医薬保	%	合計	%
【問1】 業績管理方法 (複数回答可)	1=大学の業績 DB	104	55%	133	57%	56	35%	293	50%
	2=Web サイト	6	3%	14	6%	0	0%	20	3%
	3=Word,Excel 等	96	51%	122	52%	100	63%	318	55%
	4=文献管理ソフト	6	3%	29	12%	21	13%	56	10%
	5=その都度、管理していない	44	23%	44	19%	32	20%	120	21%
	6=ReaD など	3	2%	5	2%	5	3%	13	2%
【問2】 自身の論文検索	1=よく行う	12	6%	35	15%	32	20%	79	14%
	2=時々行う	104	55%	144	61%	109	68%	357	61%
	3=行ったことはない	72	38%	56	24%	19	12%	147	25%
【問3-1】 不便に感じるか？	1=ある	50	43%	96	54%	58	42%	204	47%
	2=ない	65	57%	82	46%	81	58%	228	53%
【問3-2】 不便に感じる点 (複数回答可)	1=同姓同名、イニシャル	21	11%	70	30%	40	25%	131	22%
	2=改姓に未対応	2	1%	1	0%	3	2%	6	1%
	3=自分の業績がまとまらない	16	9%	13	6%	13	8%	42	7%
	4=DBの内容	5	3%	7	3%	1	1%	13	2%
	5=DBの使い勝手	6	3%	8	3%	1	1%	15	3%
【問4】 著者IDの必要性	1=是非必要	27	14%	36	15%	29	18%	92	16%
	2=あれば良い	115	61%	135	57%	97	61%	347	60%
	3=必要ない	14	7%	22	9%	15	9%	51	9%
	4=わからない	27	14%	33	14%	18	11%	78	13%
	5=その他	5	3%	9	4%	1	1%	15	3%

(2)年代別分析

総数	~30代	40代	50代~	合計
	157	175	251	583

設問	選択肢	~30代	%	40代	%	50代~	%	合計	%
【問1】 業績管理方法 (複数回答可)	1=大学の業績 DB	73	46%	76	43%	144	57%	293	50%
	2=Web サイト	11	7%	3	2%	6	2%	20	3%
	3=Word,Excel 等	83	53%	103	59%	132	53%	318	55%
	4=文献管理ソフト	25	16%	21	12%	10	4%	56	10%
	5=その都度、管理していない	29	18%	39	22%	52	21%	120	21%
	6=ReaD など	5	3%	3	2%	5	2%	13	2%
【問2】 自身の論文検索	1=よく行う	21	13%	26	15%	32	13%	79	14%
	2=時々行う	97	62%	113	65%	147	59%	357	61%
	3=行ったことはない	39	25%	36	21%	72	29%	147	25%
【問3-1】 不便に感じるか？	1=ある	56	48%	59	42%	89	51%	204	47%
	2=ない	61	52%	80	58%	87	49%	228	53%
【問3-2】 不便に感じる点 (複数回答可)	1=同姓同名、イニシャル	36	23%	42	24%	53	21%	131	22%
	2=改姓に未対応	3	2%	2	1%	1	0%	6	1%
	3=自分の業績がまとまらない	9	6%	11	6%	22	9%	42	7%
	4=DBの内容	4	3%	1	1%	8	3%	13	2%
	5=DBの使い勝手	6	4%	2	1%	7	3%	15	3%
【問4】 著者IDの必要性	1=是非必要	33	21%	29	17%	30	12%	92	16%
	2=あれば良い	80	51%	112	64%	155	62%	347	60%
	3=必要ない	19	12%	10	6%	22	9%	51	9%
	4=わからない	19	12%	21	12%	38	15%	78	13%
	5=その他	6	4%	3	2%	6	2%	15	3%

執筆論文等の研究業績の管理に関する全国の教員の自由意見

- なんらかの方法で大学として一括管理することが必要。(医薬保健系 50代)
- 大学や他のウェブサイトなどに、個別に入力することを求められるのは面倒で時間が取られる。一元管理したいと思うが、それぞれ一長一短があり、結局、自分のサイト上に最新で正確な情報をアップするという方法を取っている。(人文系 50代)
- 調査毎に別のフォーマットでのリスト作成を要求されることが多いので、統一して欲しい。また、物理・数学系ではLaTeX用の文献管理ソフト bibTeX を使うことが多いので、文献管理ソフト対応をする際には bibTeX にも対応して欲しい。(理工系 30代)
- 研究者自身ですれば良いのではないか。(人文系 30代)
- 自分の無精な性格が招いた結果だと思います。多少の経費がかかっても、きちんと出来る機会があれば利用したいのですが、そんなことも調べていません。申し訳ありません。(理工系 50代)
- 自己管理が重要。(医薬保健系 50代)
- 少し外れるけれど、参考文献欄の著者名について、名のイニシャルだけを示すという慣例は、そろそろ止めた方がいいのではないかと思う。(理工系 50代)
- 書き方のフォーマットを統一してほしい。(医薬保健系 50代)
- 職歴も込めてクラウドで一元管理する体制が構築できれば、研究業界における研究・競争的資金獲得・就職活動における書類作成の手間が減るのではなからうか。(理工系 40代)
- 科研費の申請書を書くとき、IDを入力するだけで業績が出て来るようなシステムにしてもらえると、便利です。(医薬保健系 40代)
- いろんな場所から提出を求められるが、形式が違ってることが多いので、それぞれの形式に合わせて作り直さなければいけないので、面倒。文章にするだけなら良いが、エクセルのファイルで、タイトル、筆者名、年、号などがそれぞれのコラムに入れるときは面倒。(理工系 40代)
- 中国人など、同姓同名が多いので、国際的に使える物にしてほしい。(医薬保健系 40代)
- 科研費の研究者番号と互換になるとよいと思います。(人文系 50代)
- 全国共通のフォーマットがあっても良いのでは。(教育・芸術・体育系 30代)
- 私自身さほどメジャーな氏名ではありませんが、それでも同姓同名の研究者の方がいらっしゃいます。このことで、多少の混乱をきたす可能性も考えられます。研究者 ID 等で区別できれば、検索する側としても便利なのではないでしょうか。(教育・芸術・体育系 30代)
- 研究内容はともかく著者にはあまり注意を払ったことがない(し、同姓同名の他者が同分野の研究をしている事例にあまり目にしたことがない)ので、研究遂行という観点からは著者同一性にはあまり価値はない。著者を厳密に分析して利用する場面が、たとえば就職昇進などのタイミングでの利用以外に思いつかず、かつその場合は基本的に当事者が(それなりに厳密な)リストを提出するはずなので、研究外での利用価値をあまり理解できていないのも正直なところである。(理工系 30代)
- フォーマットの変換が面倒に感じます。名前は珍しいので、重複はあまりなく……。 (理工系 40代)
- 一部の研究者のみ共通 ID を付与するのではなく、世界のアカデミアが合意し実施しなければ不十分だと思う。(理工系 50代)
- とにかくめんどくさい。やらないですませたい。と、真剣に思います。(理工系 40代)
- 大学の研究データベース(以前は官公庁の研究機関にいたが)いずれも手入力で行うのは、手

間隙がかかる。

- 効率的かつ負担のすくない管理データベースがあればありがたいと思う。(理工系 40代)
- あれば良いかも知れません。(医薬保健系 50代)
- 名前の漢字に複数の字体が複数あり (例：旧字体)， 普段使用している字体と違うものが混じりやすい場合， 正確な字体で検索しないとヒットしない， ということがあり不便を感じる。 共通 ID の付与で文献データベースだけでなく様々なデータベース間でも間違いなくヒットするようになるなら， 歓迎する。(社会系 50代)
- 日本人の場合は科研費の研究者番号でよいと思う。外国の情勢も見ながら進めるべき。(理工系 60代以上)
- 名前と所属の論理積で検索すれば現状でも問題ないと思います。国内だけの取り組みで Web of Science などの国際的な文献データベースに反映させられるのでしょうか。(理工系 50代)
- 統一されたフォーマットが欲しい。提出先毎にフォーマットが違うので面倒。(理工系 30代)
- 科学研究費補助金， 政府系研究補助金， 助成金， 非営利団体財団の助成金の申請書に記載する研究業績に連動して出力できるシステムが切に望まれる。さらに， 教員人事， 教員審査に掛かる提出書類中の研究業績にも連動できる出力できるシステムが切に望まれる。いちいち， 申請書ごとに同じ作業をせねばならず非生産活動に多大な時間を要し， 非効率的。(理工系 40代)
- 共通 ID はいいと思います。(理工系 40代)
- 私は THOMSON がやっている Researcher ID や Academia. edu などを利用して私の業績をまとめている。これをいかなる言語でも対応可能なものが出れば世界中の人が利用するだろう。これから新しく著者番号を作るなら， 世界にそのサービスを提供すべきだ。日本人向けのみのサービスを提供しても， それを論文にどうやって載せられるか？論文にその ID が載っていないと意味がない。そのことを肝に銘じたシステム開発を強く望む。(理工系 30代)
- 大学と CiNii の両方に登録しなくとも済むようにしてほしい。(これは， 所属大学の問題です。)(人文系 50代)
- 国内だけでやっても無意味。ISI, Elsevier, Springer, IEEE などが導入しないと使えない。(理工系 30代)
- 論文を探す場合データベースは便利。しかし， あちこちの機関が勝手にいろんなことをして， その度に， 協力を求められるのは， 迷惑。国会図書館， Nii や JST など色んな所がバラバラにやってる。また， いわゆる学術データベースは理系の発想が強すぎる。論文以外のレポートや投稿， 年鑑類の執筆も前提にした設計が必要。(社会系 30代)
- 文献データベースの共通の ID が発行されるとなると， 番号の管理が面倒。(理工系 40代)
- 日本全国で， なにか簡単に標準的な FORMAT があればよい。(理工系 50代)
- 一元化できるシステムがほしい。(理工系 40代)
- 最近論文の質の低下が甚だしい。ある程度の論文品質を確保している Web of Science 等のデータベースで研究業績の管理を行う方が良いといえる。(理工系 50代)
- アウトプットの際， さまざまなフォーマットが求められます。これらに対応した一括変換が実行できれば助かります。(医薬保健系 40代)
- H25年3月に定年退職するので， その後， 自分の研究業績リストは過去のものを含めてどのように管理して行くか， 思案中です。(人文系 60代以上)
- 将来的に， 研究者個人の ID を入力するだけで統一フォーマットの業績集やインパクトファクターやそれに類する点数計算などを素早くできるようにしてほしい。特に， いろいろな申請書

- の業績フォーマットを日本や世界標準で統一してほしい（各申請で業績を別フォーマットで作成することがいつも大変）。（医薬保健系 30代）
- 我が国だけでやっても意味がない。お金をかけて新たな我が国の「ガラパゴス」を増やすだけである。（医薬保健系 60代以上）
 - 既にある登録間違いの修正が大変。（理工系 60代以上）
 - まだ論文が多くないので、特に不便はない。（医薬保健系 30代）
 - 新たに ID を付与するのではなく、e-Rad 等の既存の ID を利用してもらいたい。ID がたくさんできると混乱するので。（理工系 40代）
 - ID を付与する場合、ある程度過去の分（10～20年）まで識別できるようにすることが必要と思います。（理工系 60代以上）
 - 海外、国内で研究機関を変えても、同一著者を検索できるようになるとよい。（医薬保健系 60代以上）
 - ID の付与は業績の詐称を防ぐのには有用だと思う。もっとも、能力が認められた研究者の論文は、改姓前のものも改姓後のものも継続的に多くの者に読まれている。要するに、ID の付与は、ほとんど読まれない、つまり質の低い論文の存在を証明するに留まり、学問の質的發展に資するものとは言い難い。（社会系 30代）
 - CiNii などと同じ論文なのに検索すると和文タイトルと英文タイトルの計2件混合して出現するので、この分野に2件論文があるのかと誤解するときがある。（医薬保健系 30代）
 - 自分の業績の管理だけであればともかく、研究室の卒業生など研究室関係者の業績の管理や追跡まで必要になるような制度設計は避けていただきたいと思います。（理工系 40代）
 - 大学の業績データベースで管理していて、特に問題と思うところはありません。（社会系 50代）
 - 大学では教職員番号があり、科研費申請では研究者番号がある。このような番号の一致などがあればわかりやすくよい。（医薬保健系 30代）
 - 過去の論文で PubMed 等に収載されていない論文の登録検索ができれば良いと思います。（食品栄養系 50代）
 - 科研費研究者番号等を使い一意の番号で管理できるようになることはメリットがあると思う。（理工系 40代）
 - 私自身は同姓同名の研究者がいて困ったことはないが、そういう方もいらっしゃると思うのであれば良いかなと思いました。論文を執筆する時間をできるだけ削らないで省力的な方法を希望します。（理工系 40代）
 - 各大学で評価 DB を作るのは税金の無駄なので、ReaD & Researchmap に集約し、を強化してもらおうのがよいと思う。そのためには、外国語の論文や、論文/国際会議/国内学会、査読の有無等、整理方法の改善が必要だと思う。（理工系 50代）
 - クックパッドのように、引用された回数とか、閲覧された回数とかがメールで通知されるようなシステムがあるとよい。被引用の論文は検索すると出るようになっているが・・・フェイスブックなどでは予想外のつながりや、情報の使われ方がされていてちょっと怖いと思う時もある。（医薬保健系 30代）
 - 文献データベース間共通の ID を各研究者に付与することは、新たな手間になるようでしたら、不便かと考えます。（医薬保健系 50代）
 - 名寄せは WoS や Scopus でもやっていると思いますよ。（理工系 50代）
 - 科研費などで共通に使えるデータベースがあると便利です。（医薬保健系 30代）

- 年間、様々な媒体で研究業績をばらばらに提出しないといけないので、何か一括して入力・提出できるシステムが欲しいです。業績管理の一括化が希望です。(教育・芸術・体育系 40代)
- 論文が掲載された雑誌の impact factor (掲載された当時の数値) を付与するのに苦労しています。(理工系 40代)
- 科研の研究者番号を活用すればいいとおもいます。極論すれば、論文発表時に所属も氏名もかかずに研究者番号だけをかくようなシステムにすれば、査読の公平性という点でもいいとおもいます。それでも優秀な論文を多作する人はみんなが番号をおぼえてしまうかもしれませんが。(人文系 50代)
- 本年3月末日をもって定年となりますので、特にありません。(人文系 60代以上)
- 調査の趣旨や導入による利点、不利点がわかりません。(理工系 30代)
- 結局、その作成にどれほどのコストがかかるのかだと思ふ。何でも便利にすれば、良いとは思えない。では、全国の研究者にお願いして、入力してもらうってのは？これも、駄目。すごいコストがかかる。そのコストに対してのメリットが無さすぎる。研究者が自分でコツコツやれば、良い事だと思ふ。(理工系 30代)
- 自分の業績を管理しておくのに、Web of Science などの検索で同一イニシャルの人物の関係のない論文がヒットしないようにできれば、非常に便利だと思います。(理工系 30代)
- ID を付与するかどうかだけでなく、どのような文献データベースシステムを構築するかもセットで考える必要がある。(理工系 40代)
- 共通財産として、業績管理は所属機関や文科省で一括管理をしていただけるとありがたい。また論文の本文の閲覧や請求などができるともっとよい。多くの申請書類に同じ内容を何度も何度も写すのは手間がかかるので、研究者 ID による業績管理データベースを閲覧することで済ませることができるとよい。(人文系 40代)
- データベース検索では、所属などをキーワードに入れて対応しています。大学内でも複数の異なる部署から業績データの登録・提出を求められるので大変手間です。一元化して参照できるようにして欲しい。(現状ではインターフェースに不満はありますが、Researchmap が妥当だと思います。)(理工系 40代)
- 業績が数百ありかつ同姓同名の研究者がいるような方は上記の ID は必要かもしれないが、大部分の研究者は一般に必要なかと思われず。(農学系 50代)
- いいアイデアだと思います。科研申請時の研究者番号とも統一して世界的に広めると使いやすいと思います。(医薬保健系 30代)
- 今は、Researcher ID を使っているので、同じイニシャルの著者の問題はほとんどなくなった。なので、新しい管理システムを導入しても使うかどうかはわからない。(理工系 50代)
- 識別という点では漢字表記では異なってもローマ字化すると同じ場合がある。たとえば護雅夫と森正夫はともに MORI Masao である。また、日本人姓名のローマ字表記も、この際、姓名とするように提言されたい。中国人、韓国人は姓名なのに、なぜ日本人のローマ字表記は名姓か根拠がない。(人文系 60代以上)
- 基本的に個人の責任だと思ふ。もし、使い勝手の良いデータベースができるなら利用したい。(理工系 60代以上)
- CiNii がさらに充実することを願っているところです。文献 DB 間共通の ID ができたとしても、日本固有のものだと役に立ちにくいのではないかと思います。国際的なものでなければ、継続して効果を期待するのは難しいと思います。(教育・芸術・体育系 50代)

- 雑誌名の略号ルール，たとえば，Biology→BIol。などが雑誌間で違い，いつも混乱します。(理工系 40代)
- 研究者各人が不便と感ずることと，利用者各人が不便と感ずることとを，混同するべきではないでしょう。つまり「利用者が望んでいるから研究者のみなさんも望んでいるでしょう」とは決して言えないはずです。その逆もしかりです。「業績」を管理することと，「業績記録情報」を管理することは，まったく別のこととす。「業績」そのものを「管理」することなど，誰にも（著者にも）できないのではないのでしょうか。(教育・芸術・体育系 30代)
- 個人的には今のところ，問題はないが，結婚に伴い改姓したので，同一人物の研究と見なされないのではないかという不安が以前あった。職場によっては，旧姓使用を認めないところもあるので，その点で女性には不利な場合もあるのではないかと思う。(教育・芸術・体育系 30代)
- そもそも，ID で管理されていれば履歴，実績については採用側が簡単に調べられるので，申請者が整理して出す必要がなくなる。申請者は自分で確認して，それに掲載されていない分の実績だけを準備すればよくなる。また，データベース全般に比較的共通していえると思うが，個々の論文等に補足するコメント欄があれば，もう少し整理しやすい，中身が判りやすいと思うし，その論文がなにか受賞したなど，重要性も判りやすい。(理工系 30代)
- 確かに，同姓同名の先生がおられて，驚きでもあり，楽しみでもあります。(医薬保健系 60代以上)
- 最近は，自分の論文についても，Google scholar で検索した方が，被引用文献の検索などもできて便利になってきており，もっぱら Google を使うようになってしまった。著者 ID もよいとは思うが，特定の団体や国だけでなく，Google scholar などの検索システムでもうまくつかえるような仕組みとして実現できるよう工夫がなされると良いと思う。(理工系 30代)
- 大学の研究情報管理システムで管理しているが，これまでとくに問題はなかった。著者識別番号についての導入意義や背景について情報がないため，それらにかかわる判断はできない。著者
- 引用文献の書式がそれぞれの雑誌で異なるので，統一されると便利だと思います。既にある機能かもしれませんがまた，それぞれのデータベースの出力の際に，いくつかの書式（ある程度統一されれば）に対応した出力が出来ると管理が容易になるのではないかと思います。(理工系 50代)
- 研究者番号で良いのでは？(理工系 50代)
- READ で一元化する方法もある。(理工系 50代)
- 市販されていない文献（例えば学会のスタディ・グループの報告書）や共著の著書の業績についても，含めていただければ助かります。(社会系 40代)
- 研究者の ID 付与なら，科研費申請時に使用するものの方が便利でありがたい。(社会系 60代以上)
- まさに誘導されたようなアンケートなのですが，研究者 ID がなないので外国語で執筆した論文はおろか，日本語で執筆したものも別の著者として検索されてしまいます。(社会系 50代)
- ID の文化が浸透すると良いと思われるが，論文以外の様々な分野でも多数の ID が付けられて，当事者の管理も大変になる。国民番号の是非も検討されているが，管理・セキュリティの難しさの反面，すべてを1つの番号で登録できるとユーザーは扱いやすいと感ずる。(理工系 30代)
- フォーマットを統一していただけるとありがたい。(理工系 60代以上)